

---

# 十 正義の崩壊者 十

墮倉 夜罪

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

十正義の崩壊者十

### 【Nコード】

N2566V

### 【作者名】

墮倉 夜罪

### 【あらすじ】

ある日自室で原因不明の大爆発が起こり、俺は死んだ筈だった。

しかし瞼を閉じ、次に目を開くとそこには神と名乗る仮面の男が居た。

男は言った。

「貴様を今から力を与え、転生させる。転生先の悪を葬り続けてもらうがな」

そして色々訳あって幻想郷に居着くことになった。

どうも、作者です。

先に言っておきますがこの小説は色んな理や設定をこれでもかかって具合にぶち壊します。たぶん…

苦手な人は見ない方がいいです。

【小説家になろう】では初投稿となります。

何分ボキヤ貧作者の気まぐれとノリで構成されているため誤字脱字がパナいかもです。

コメ等も荒らしでないなら大歓迎です！！

## 最初の転生は幻想郷

「ククク……遂に来たぞ！！幻想郷！！取りあえずミステリアだ！！どこだミステリア！！」

遙か彼方の地、幻想郷。

夏でも無いのに大量の向日葵が咲き誇る向日葵畑のド真ん中にバカの姿が……そこにはあった。

てか俺ですね、バカです。

「俺の名前は鬼澤おにさわ 颯はやて！歳は17で身長は173、体重64キロ、特徴は特徴が無いこと！！強いて言うならネット充かなWWW」

「人の敷地内で何やってんのよ？」

.....。

おっと、死亡フラグがやって来やがったよコンチクシヨウ。

現在、俺の目の前でキレてらっしゃる御方は風見幽香その人だった。いきなり幻想郷の話をするのも何だ、俺が転生する前の事を話そう。

時は遡り、俺が転生する少し前。

いつも通り部屋で掲示板を巡回していた時の事、急に目も眩む程の強烈な光を放つ球体が部屋の宙に出現した。

「な、なんだこれ!？」

そしてそれは徐々に膨張し.....強大な大爆発を引き起こした。まあ当然と言うか...

目の前で爆発したもんだから痛みを感じる前に即死ですね……

リア充じゃないのに……

そして気付くとおかしな事に五体の感覚がある。

重たい瞼を開くと、真っ白な部屋に俺と、仮面を付け、赤いフード付きのマントに身を包んだ人がポツンと居た。

「目が覚めたか。よく聞け脆弱なる人間。今からお前を転生させる」

いきなり何言ってるんだコイツ。それと声からして男らしい。

「あんた誰よ？」

取りあえず一番の疑問はそれ。

「我か？人間の語で言つと神に当たる存在だ」

紙？髪？なんつった？

「神だ。そんなことより」

「オウドランタベタイ！！」

「ゲームは解るか？」

スルーッスか、なかなかのスキルをお持ちの神様でWWW

「ゲームって何の？」

「携帯ゲームやテレビゲームの事を言っている」

「知ってるも何もやりまくりまくりまくりですよ」

「なら話は早い、お前を転生させる先はゲームの世界になるからな」

「アールグレイネタもスルーかよ……てか二次元入りk t k r」

「何のゲームよ？」

「それは好きなのを貴様が選べ。一番最初に決めるのは拠点となる世界だ、慎重に……」

「なら迷うことなく東方だ!!」

「ふむ、それはいいが一息に東方と言ってもどの作品だ？」

「は？それってつまり東方紅魔郷を選択したら地霊殿とか妖怪の山とか行けなくなるわけ？」

「それが嫌か？」

「当たり前だろ？」

「ならば条件付きでその願いに応えよう」

「条件？」

「そう……東方紅魔郷の異変解決を巫女の代わりにやり遂げる……それができたら共有化してやろう。もっとも紅魔館以外の場は最初から移動可能だが」

「初っ端から紅魔郷かよ……えげつない」

「勿論貴様には力をやる。コイツを受け取れ」

そう言って神は何かを投げて寄越した。

反射的にそれを受け取り、よく見れば俺の携帯だった。

「なめてんのか？たかが携帯一個で紅魔組に勝てるんでも？」

「焦るな、そのデバイスは色々改造してある」

神の説明によるとこうだ。

十半永久駆動

バッテリーの改良により、充電をしなくても動く。

十圏外無視

圏外なにそれおいしいのらしい。

十弾幕切り取り機能

まんま文花帖。決定ボタンを100回押せば一枚撮れる。

十弾幕生成機能

切り取った写メを消費することでその弾幕を好きな方向へ放てる。

十破壊耐性最大

どんな手段を使っても破壊出来ないらしい。

あと耐水加工もされてるらしい。

十全料金無償化  
イヤッハウネットし放題

十 武具の召喚  
詳細を入力して起動するとその武具が召喚できるらしい

十 瞬間移動機能  
場所を入力して起動するとその世界にあればその場所へ送還される。

等々、なんかチート紛いのとどろんでも良さそうなのが混ざってるが  
気にしない。

「 随時アプリを追加してやる。 必要無いと判断したものは勝手に削  
除するが 」

「 いまいち実感わかないけどまあいいか…… 」

俺の携帯に勝手なことしゃがって。

「では、転生の儀を始める」

そこで俺の意識は途絶え、現在に至る。

「出て行くならあと10秒以内ね……10、9、8、7、6、5……」

一目散に逃げたよ。

逃げなきゃ死ぬしね。

俺は向日葵畑から離れ、早速携帯を開いた。

「ええ」と……目的地紅魔館の地下」

早速フラグ建てますおWWW

一瞬にして俺は恐ろくだが紅魔館地下に来ていた。

「薄気味悪いな」

移動先は嚴重に施錠された扉の前。当然この先に最終鬼畜妹が……

「誰？」

「待ってる、今出してやる」

携帯のアプリの内の一つ、武具生成機能を起動し、こう入力した。

分類、籠手

強度、壊れない

能力、衝撃による反動ゼロ

触れたものに分解効果

装備時想い描いただけで弾幕を放てる

装備時空中浮遊が可能になる

やっぱりチート使わないとどうやらこの扉は傷1つ付かないようでw  
ww

入力を終わると両手に自動的に籠手が装着された。

見た目は黒を基調としたなんかの甲殻っぽいのが付いており、重みはたぶん片方2キロ弱程度。

特に変わった所は見られない。

「どれどれ」

扉に触れる。するとみるみるうちに扉と門カンヌキがサビ、崩れ落ちた。

「一応分解の範囲は制御できるんだな」

「な…一体どうやってその扉を…パチュリーの能力無力化の魔法が掛かってるのに…」

「チートにそんなもの関係無いZ E とりあえずこっちにおいて」

「あなた誰？」

「俺は鬼澤颯。レミア・スカーレットが発生させてる紅い霧を消させに来た」

「紅い霧？それと私に何の関係があるの！？私はここから出ちゃ行けないの！！関わらないでよ！！」

「フツ…なら弾幕ごっこで俺が勝ったら着いてきて貰う、スペカの制限なしの3回被弾で負け」

「人間ごときが私に勝てると思ってるノ？」

「さあてね？」

「壊ス！！！！！！」

俺との距離を一直線に詰めるフラン。

「スペルカード発動【禁忌】レーヴァテイン」

スペカ宣言と同時に真っ黒な剣がフランの手に握られ、そのまま突進してきた。

## 【最初からEXボス「フランドール戦」】

ガシンッ!!

「何!?!」

俺はフランの突進+剣の追突を両手で防ぎ、レーヴァティンを分解した。

「次はこっちの番だぜ?」

俺はレーザーと星形の弾幕を同時にバラまく。

「弾幕はパワーだZE」

「スペルカード発動【禁忌】フォーオブアカインド」

俺の弾幕に掠りながらもフランは紅蓮のスペカを宣言した。

するとスペカ自体が燃え、フランの分身体を3体創り出した。

そして4人となったフランから次々に花火状の弾幕が展開される。  
その大きさは大小様々で、正面から見ると避けれる気がしない。

「ククク……全部分解してやる」

迫り来る弾幕を両手で防ぎ、次いで分解する。

しかし弾幕は一向に減る気配が無い。

「よし、右手で決定連打だ」

どうにか左手だけで弾幕を分解しつつ、右手で携帯を取り出し、決定連打をする。

「100連打完了！！原作より遙かに時間掛かったけど」

標準に大量の弾幕を捉え、決定を長押しした。

すると携帯独特の写メ音が流れ、フ란の弾幕がほぼ全て一気に消失した。

「!!!?」

「それだけじゃないぜ?」

データフォルダに保存したフ란の弾幕を選択し、メニューから実体化を選択した。

画像が強制的に消去され、目の前にさっきまで俺を的にしていた弾幕が今度はフ란目掛けて出現した。

突然の事に反応が遅れ、本体が2度被弾、分身体は凄まじい勢いで弾幕に体を貫かれ消失した。

「クソ……スペルカード発動！！【禁忌】クランベリートラップ！」

余程頭に来ているか焦っているのだろう、原作とは似ても似つかない程の緻密な弾幕を展開してきた。

が、俺は弾幕が俺の体に到着する前に携帯にあることを入力していた。

十瞬間転移

移動先

紅魔館地下のフランドール・スカーレットの真後ろ。

どうやらこんな当てずっぽうな文章でも移動できるらしい。

俺はフランの真後ろへ転移し、肩をつついた。

フランは反射的に振り向くと一瞬驚いた顔をする。

その際に最弱の弾幕をフランの額に当てた。

「コノ野郎ッ!!」

「おっと、負けは負けだ、素直に従ってもらおうか」

「ウルサイ!! スペルカ」

「分解対象、フランドールの狂気」

俺は一か八か、フランの頭の上に手を置き、分解を使用した。

「うっ」

「おっと、危ない危ない」

籠手の能力の制御は、どうやら上手くいったようだ。

しかし狂気を分解って……かなり無茶だが鈴仙涙目だなWWW

俺は体勢を崩して倒れそうになったフランの体を受け止めた。

「あ？」

急に体がふらふらしてきて、視界が紅に染まった。

「遅……かった……か……」

多分、フランに『破壊の眼』を使われてたんだろ……急速に視界が暗くなり……暗転

## 複数同時対決【レミリア&パチュリー戦】

「だ……………しょうね」

「ですが　　は？」

「問題無いわ　　にしても　　が　　ね」

俺は周りから聞こえてくる会話で目を覚ました。

「　　く　　」

「　　せ　　お　　目覚めの　　ね」

「　　ち　　レミリアか」

「あら？私の事を知ってるなんて……………誰かの入れ知恵かしら？」

目を開くとまず赤い天井が目に入った。

次に横へ目をやると永遠に幼き月ことレミリア・スカーレットとその従者、十六夜咲夜の姿が確認できた。

「知ってるも何も緋想天じゃお世話になったからな」

「初対面よね？」

「一応。俺は鬼澤颯、あんたはレミリア、そっちが咲夜さんだろ？」

「なんで咲夜がさん付けで私が呼び捨てなのよ？」

「いや、咲夜さんはさん付けしないと。レミリアに限っては一時期様付けしてたけど……言うから止めた」

「う……？そんな事言った覚えは無いけど……そんな事はどうでもいいわ、この際あえてどうやって地下に侵入しあの扉を破壊したのかは聞かないから一つ質問に答えて」

「内容によるが……」

「あの子に何をしたの？情緒不安定だったのに今は凄く落ち着いてる。それどころか何故か貴方の事を気にかけてる状態」

「細かく説明すると長いから多少はしよるけどって　俺の籠手は  
「？」

「どござ」

妖精のメイドが俺の籠手を運んできた。

「サンキュ、この籠手の能力…幻想郷風に言うと『念じた物事を分解する程度の能力』でフランの狂気を分解した」

「物に能力が宿るなんて聞いたこと無いけど……それより感情の類まで分解出来るなんて……」

「それだけじゃない、こいつは俺の意思以外で壊れることもないし

例えばの話だがレミリアのデーモンロードを真っ正面から受け止めても体勢一つ崩さない」

「へへえ。大方分かったわ」

それだけ言つとレミリアは部屋を出ようとする。

「それだけでいいのか？」

「話す気があるなら先に傷を癒しなさい」

そしてレミリアが部屋を出ると咲夜さんが話しかけてきた。

「此度は本当に有り難う御座いました。妹様がなんだか鎖から解放されたように元気なんです」

「タメ口で構わないよ。フランは何処に？」

「妹様なら地下に居ます。それと扉は普通の物に取り替えました」

そこで今更ながら扉を壊したことに気付いた。

「ほんつとにすいません！！勢いとは言え扉壊しちゃって…」

「気にしないで下さい」

咲夜さんはニコツと微笑むと一瞬で姿を消した。

「俺は泊まっつていいのか？」

その独り言を聞くものはおらず、夜は更けていった。

翌朝。

多分朝5時ぐらい、空腹で目を覚ました。

「昨日から何も食ってないから腹減ったな」

体調が昨日に比べ、軽くなってるのを確認し、籠手を嵌める。

そして空中をふらふら飛びながら部屋を出、廊下を進んだ。

「お、さっきゆん発見」

廊下の先で窓を拭いている咲夜さんを見つけた。

「随分早いつすね」

「朝食等の準備が有りますので」

「手伝おうか？」

「怪我してるんですから無理しないで下さい」

「鏡がないからわからないんだが俺の怪我って何なんだ？」

「額に包帯が巻いてあるのがわかりませんか？」

「予想ですが妹様の能力によって額を抉られたんでしょう」

「成る程、納得した」

「朝ご飯とかどうします？」

「泊めて貰つといて難だけど風呂に入って良いかな？流石に昨日から入ってないと臭いし」

「そうですね、ちょうどこの真上あたりに浴場が有ります」

「ありがとうございます」

咲夜さんと別れ、階段を探して館内をうろろろしていたら当然が如く迷った。

「予想通り杉ワロタ」

俺は数分間迷い、ようやく階段を見つけて浴場へと向かった。

脱衣場で昨日から着っぱなしの服を脱ぎ、腰にタオルを巻いて、浴場に入った。

カラカラカラ

「……………」

「。」

フラグは回収したよ

(。°。)

(。―。)

カラカラカラ〜ガタン!!

「ふう。良い絵だった」

「いやああああ!!!!!!」

突如、後ろから悲鳴が上がり全身から嫌な汗が出てきた。余計臭い。

いやほら温泉とかの定番じゃん?入ったら裸の女の子がポツーンと一人居る現象。湯気で(ズッキューン)とか(見せられないよ!!)とかは隠れるけど。

まあ要は何が言いたいかってーと、浴場のスライドドア開けたらすっぽんぽんの小悪魔が居ましたとき。

数分後。

悲鳴に駆けつけた咲夜さんと着替え終わった小悪魔の前で土下座している少年の姿が…そこにはあった。

はい、私です。

「不慮の事故です。すみませんごめんなさいピンポイントは湯気で見えなかったから大じよぶほあ」

「—————っ／／／／」

赤面しながら俺の頭をげしげしと踏みつける小悪魔。正直痛くも痒くもない。

「本当にすみませんでした。まさか中に小悪魔様が居るとは微塵も  
思いませんでしたはい言い訳ですすみません」

「小悪魔だったから良かったけどお嬢様だったら死んでいましたよ  
？」

「よ、よくななんかああありません！！」

「落ち着きなさい。悪魔の端くれでもあなたは悪魔。たかが人間に  
裸を見られた程度で騒がないの」

「あの〜長くなりそうなら先に風呂に入っっていいですかね？」

現在俺は腰にタオル一枚の格好。当然このままだと風邪を引く。

「こんな見苦しい格好のままだとどうかと思うんで」

「「あっ」  
「」

何故か二人して顔を赤くして目を逸らす。

「あの〜?」

「は、早く入ってきて下さい!」

「そ、そうですよ!」

これ以上ここに居るのは危険と判断し、俺は大浴場へ逃げ込むようにして入った。

それから更に数分後、脱衣場に戻ると、何故か俺の服が消え、変わりに執事服と紙切れが置いてあった。

「なにになに…」男の子用の服はそれしか無いから我慢して下さい B  
Y 咲夜」

俺は仕方なく執事服に袖を通し、脱衣場を後にした。

「大変です、正面門が突破されました!!」

「直ぐに衛兵を。私も直ぐに向かうわ」

廊下に出た途端、咲夜さんと息を切らした妖精メイドが会話していた。

「わかりました、直ぐに衛兵を向かわせます!!」

「相手はたかが巫女一人!!お嬢様に何かあつては申し訳が立たない!!」

「待って下さい咲夜さん」

俺は明らかに修羅場な雰囲気の話に割り込んだ。

「実はその巫女…俺の友達何です。ですから俺に任せて下さい」

こんな所まで来て霊夢と魔理沙に突破されてレミリアを倒されちゃ  
適わない。

あ、咲夜さんも一応危険人物か。

俺は携帯を取り出し新たな武具を創ることにした。

分類 眼鏡

強度 壊れない

能力 装備時、自由に結界と魔法陣を操れる。

見た結界の種類と破壊方法が判る。

見聞きした魔法陣、魔法、呪文の種類と効果が瞬時に判る。

見た相手の戦闘力、弱点を把握できる。

度数 千里眼を取得できるレベル

スカウターに近いWWW

てか度数大丈夫かWWW

出てきたのは一見ただの黒縁眼鏡。それが俺の視界と重なったとき、瞬時に霊夢が居る場所を理解できた。

「桜涙目WWWんじゃ行つてきます。それと妖精メイドは退避させ  
といて。巻き込んだら悪いし」

「しかし……」

「心配すんな。俺はフランに勝てたんだぜ？たかが霊夢ひとり……  
…大丈夫だ、問題無い」

やべWWWフラグ建ったWWW

すぐさま籠手を装着し、妖精メイドと入れ違いながら正面玄関に向  
かった。

「見つけたぜ」

正面玄関に到着すると、紅白色の巫女が一人居た。  
どうやら奥へ進もうとしてるらしい。俺は2階から飛び降り行く手を遮った。

「誰よあんた？あの門番みたく邪魔する気？」

「悪いが吸血鬼は譲れないぜ？」

「てことは邪魔者ね。強行突破させてもらっわ」

「こいつが破れたらな」

「へ？」

俺は霊夢の目の前に多重防御結界を張り巡らせた。

「時間稼ぎにしかないが……いくら霊夢でも半日は掛かるだろ  
www」

「こんな複雑な結界を一瞬で……」

「安心しろ。後日ちゃんと吸血鬼を紹介するから。霊夢に先を越される訳には行かないんだ」

「あんだ名前は？」

「すまんすまん。鬼澤颯だ、以後お見知り置きを博麗霊夢」

「私見ての通り巫女をやつててね、博麗神社に仕えてるんだけど……」

「だから後日ちゃんと連れて行くつて。それと出来れば霧雨魔理沙にも忠告しといてくれないか？」

「嫌よ、めんどくさ」

「お賽銭入れるからさ」

「OK了解したわ。全力で止めるわ」

巫女単純www予想通りだがwww

「じゃ頼んだぜ」

「裏切ったら地獄の底まで追いかけるからそのつもりでね」

巫女怖っ!!!!!!

とりあえず俺は理由作りのために地下へ向かった。

「フランちゃん。居るか?」

「鬼澤颯？」

「そうそう。ちよいと失礼するよ」

俺は戸を開き、フランの部屋へ入った。

「フラン。ここから出たい？」

「本当は出たい……でもねえ様が私には危ない力が宿ってるから駄目だって……」

「なら……まずはそのふざけた幻想をぶち壊す！！っーわけで付いて来て俺の力になってくれない？」

「えっ？ええ！？」

フランちゃん絶賛混乱中。

「本当は出たいんだろ？安心しろ、昨日は酷いことしちゃったけど  
これからは俺が守るから」

「ほんと？ほんとに出れる？」

「もちろん。フランにその気持ちがあればね」

「じゃあ約束してくれたら付いてく」

「いいよ？」

「フランと兄妹になって？」

「ああ。その程度お安いごよ………つてええ！？」

「やった これからはお兄ちゃんと呼ぶね？」

「」

しまったああああ!!

こんな所でフラグ建てちまったあ!!!!!!

どうすんのこれ!!

ねえ神様どうすればいいの!?

突如、携帯から着信音が流れ見るとメールだった。

『フラグ建てすぎたならハーレムでいいじゃないか。それが許される世界なのだからな』

んだとおおお!!!!

良いこと言ってくれんじゃねえかああ!!!!!!

「やっぱりダメ?」

「オールオツケー音」

フランと俺は部屋を出て、フランの案内の下広間へ向かった。

「レミリア、入るぜ」

「どござ？」

俺は分厚い樫の木で出来た扉を押し開き、一步踏み込んだ。

そこに居たのは朝食を取ってるレミリアとパチュリーの姿があった。

二人は後ろのフランを見て目を丸くして驚いている。

「っ！？これはどございう事？」

「一晩泊めて貰った恩を仇で返すように悪いが……フランを自由に

しろ」

「何故？アナタもその能力で額に傷を負ったのよ？普通ならフランを助けようなんて思わないんじゃない？」

「生憎、俺はもう普通じゃないんでね」

「和解よりも血。そう言いたい人間？」

「確かに、理になってる。力こそ全て」

「2対1は卑怯ね、私も加勢するわレミィ」

こうして俺とフラン対レミリア&パチュリー戦が開幕された。

「先にルールを決める。残機は3。スペカの使用制限は3。味方からの当たり判定は無し。掠り判定は無効だ」

「この小説での掠り判定有無は、

有効ならば掠っても被弾扱い。無効なら掠っても被弾扱いされない。」

「問題ないわ」

「問題無しね」

「では開始!!」

俺の開始宣言の直後、3人はいきなりスペカを発動した。

「スペルカード発動!!【禁忌】フォーオブアカインド」

「スペルカード発動、【金符】メタルファティグ」

「スペルカード発動!!【神罰】幼きデーモンロード!!」

三者三様のスペカ宣言をし凄まじい密度の弾幕が展開され始めた。

レミリアが使用したスペカにより、何本ものレーザーが飛び交う。

パチュリーのスペカにより8つずつに分裂する弾幕が放たれる。

拳げ匂味方なのにも関わらず視界を埋め尽くす程の紅弾をすぐ側で放ち続けるフラン×4。

弾幕多杉ワロタWWW

「いや確かにスペカ使って良いとは言ったけど開幕は通常弾だろ常考」

「デーモンロードを受けても体制一つ崩さないんじゃないの?」

くそ、レミがドヤ顔で上から目線とか……可愛い過ぎて死ぬるWWW

「詰めが甘いな」

「？」

「こんなことも有ろうかと100回連打済みなんだよ！！フラン！早くスペルブレイクしろ！！」

「わ、わかった！！」

「この小説でのスペルブレイクは只単にスペカの効果切れを示します。防御がさがったりダメージ補正が入ったりするわけでは有りません」

そう言うなり、一際多く弾幕を放ち、分身を消したフラン。

「それでいい」

ニヤニヤが止まりませんWWW

目前まで迫った弾幕が、

カシャッ！

と言うシヨボい音と同時に全て消えた。

「何!？」

「えっ!？」

上からレミアア、パチュリーがお送りしたピツクリボイス!! 脳内で再生してくれ!! WWW

「じゃ、全部」返却するぜ!」

データフォルダから今し方撮った虹色の水玉模様しか写っていない  
画像を実体化した。

「パチエ！！相殺するわよ！！」

「了解」

「スペルカード発動！！【紅符】スカーレットマイスタ！！」

「スペルカード発動【火土符】ラーヴァクロムレク」

お次は紅魔郷のレミア戦に置いて俺が一番ボムを使う超密度のス  
ペカですねwww

パチエのは確か軌道が変化する弾幕だったな。

そんな呑気な事を考えていると、弾幕と弾幕がぶつかり合い、小規模の爆発が起きていた。

「フラン！！弾幕を追加で撃つぞ！！」

「うん！！スペルカード発動！【禁弾】スターボウブレイク！！」

うはwww観客ぶっ飛ばしまくったスペカk t k r！！

フランから様々な色の弾幕が大量に放たれ、レミアとパチュリーに追い討ちを掛けた。

俺も多量の弾幕を放つ。

その後30秒程持久戦が続き、どうやらパチュリー、レミアの順にスペルブレイクしたらしい。

「任せてレミィ。スペルカード発動、【火水木金符】賢者の石」

やばい……パチュリーが賢者の石使いやがった…  
ハオーポッオーがあ！！wwww

冗談はさておき弾幕を放ちながら余裕の100回連打を達成した俺。  
取るべき行動は一つ。

「はい残念」

俺はパチュリーの出した石を全て写真に収めた。

「くっ！！」

フランのスターボウブレイクによりパチュリーが3回被爆し、離脱

した。

「空氣的に俺も離脱だな」

相殺仕切らなかつたレミリアの弾幕にワザと3度被爆し、俺もリタイアした。

俺のリタイアと同時にフランのスターボウブレイクも終了した。

「ねえ様……」

「フラン……」

「私が勝つたら……本当に自由にしてくれるの？」

「……………」

「応えてよねえ様!!」

「あなたは何も分かってない……」

「何が!？」

「私がフランを閉じこめたのはあなたを守るため。でも…それだけじゃなかった……」

「……」

「心のどこかでフランを怖がってたのかも知れない。だけど……」

「もういいよ、ねえ様」

「えっ?」

「フランはねえ様が好き……だから怖がられようと……フランの好きは…変わらない」

徐々に涙を流しながら話すフランに目を丸くするレミリア。

「ねえ様は……ひぐっ……フランの事……どう思ってるの？」

「私もフランが好き……そんなの……当たり前じゃない……」

「じゃ……あ……お願い……フランが……勝ったら自由に……して」

「それは……」

「その時……は大丈夫だよ……お兄ちゃんが……居るから」

「お兄ちゃん？」

「お兄ちゃんと約束したの……フランのお兄ちゃんになってって。それで……守ってくれる……って」

「そう……ならもう……何も言わないわ、全力で来なさいフラン！  
「！」

「うん!!」

「スペルカード発動!!【神槍】スピア・ザ・グングニル!!」

「スペルカード発動!!【禁忌】レーヴァテイン!!」

## 決戦！！【フランドール対レミリア】

フランは漆黒の剣を、レミリアは紅蓮の槍を手に、翼を広げ、物凄い早さで飛び交った。

2つの紅い影が交差する度に発せられるかん高い金属音と火花。

さらにはお互い弾幕を張り巡らせ、どんどん窮屈な戦いになっていく。

そして激戦の最中、レミリア、フランの両方共2度被弾し、尚も攻撃の手を休めず、切り、突き、なぎ払い、振り下ろし、激戦は長いこと続いた。

やがては弾幕を出す余裕も無くなり、ただの肉弾戦と化し、遂に決着が付こうとした。

「ハア……ハア……こんなに本気で戦ったのはいつぶりかしら……」

「ハア………ハア………フランもねえ様と遊ぶの久しぶりで嬉しかったよ？」

お互い肩で息をしながら対峙する。

「終わりにしましょう」

「そうだね」

レミリアはグングニルを全力投球した。

フランもレーヴァティンを全力で振り下ろした。

レミリアの投げたグングニルは光の軌跡となり

フランの振り下ろしたレーヴァティンは紅い衝撃となり

それらはぶつかり合い、霊力が尋常じゃ無い量溢れ出し、大爆発を引き起こした。

立ち込める爆煙の中、息を飲んで見守る俺とパチュリー。

煙が晴れるとそこには傷だらけになりつつも立つレミリアと倒れたフランの姿があった。

「俺達の負けか…」

「負けたわ」

「え？」

バタリとレミリアも倒れ、気を失う前にレミリアはこう言った。

「最後の爆発の前……私のグングニルは威力で押されてた……でもフ  
ランはワザと威力を落として均衡させたみたい………ほんっと……バ  
カナ妹ね………」

レミリアはそのままカクンと意識を失った。

「バカはねえだろ 実の妹に」

ボタン！！！！！

背後で扉の強く開かれる音がし、振り返ると霊夢、咲夜さん、初登  
場の魔理沙が居た。

「お嬢様！！妹様！！」

「遅かったわね……」

「しょーがないなあ」

「あんたたち……また来たの？」

咲夜さんはフランとレミリアを抱えてから消えた。

俺は霊夢と魔理沙に話し掛けた。

「あの結界……よく壊せたな」

「アタシのファイナルマスタースパークと霊夢の夢想天生でぶち破ったぜ」

「堅すぎでしょあの結界……それで漸くヒビが入って私がこじ開けたのよ」

「流石だな。魔理沙の案か……俺は鬼澤颯。よろしくな魔理沙」

「おう、よろしく。ってなんでアタシの事知ってるんだ？」

「幻想郷で魔女といったら数える程しか居ないだろ？」

「つまり私が有名ってことだな!!」

「泥棒でね（ボソツ）」

「死ぬまで借りてるだけだぜ」

俺達が話していると、妖精メイドが一人来て、こう言った。

「メイド長からの伝言です。」

2人は明日になれば目を覚ますそうです。

颯様は厨房に行つて下さい。

もうお昼近いですが朝ご飯が用意されています」

「何から何まで悪いな」

「それと博麗の巫女と霧雨嬢はメイド長がお戻りになられるまでここで待っていて下さい」

「面倒ね」

「問題ないぜ」

「では私はこれで……」

俺は霊夢達と別れ、『kitchen』とプレートが掲げられた一室を探し当て、遅めの朝食を取ることにした。

## 一週間の休息

俺は朝食のトーストとベーコン、スクランブルエッグを食べ終わり、昨日使っていた部屋へ戻った。

奇跡的に迷わずに部屋へと到着した俺は部屋のドアノブに手を掛けた。

その時、携帯の着信音が鳴り響いた。

因みに着信音は もう歌しか聞こえない だwww

携帯を開き、メールを確認すると、

『褒美としてアプリの強化と追加をしておいた。  
一週間の猶予をやる。その後は次の世界だ、その世界の悪が葬られたら幻想郷に戻る』

b y 神

ふと思った感想。

GANTSUか!!!!!!

俺は返信ボタンを押し、こう返した。

『紅魔郷はこれでクリアなのか？俺はフラン、レミリア、パチュリ  
ーに勝っただけだぜ？』

直ぐに返事が来た。

『この場合、レミリアがフランドールを自由にする事を許した。そ  
れだけでレミリアは計画を中断した。つまり一応異変は解決された  
事になる。』

因みに全ての世界の時間は統一している、別世界へ行き3日滞在し  
たら幻想郷でも3日経っていると覚えておけ』

b y 神

成る程。要はフラン助けたから万事解決ってわけか。

よくよく考えると俺レミリア倒して無いじゃん。

っと そんな事考えてる場合じゃなかった。  
ミスティアだミスティア。

早く会わねば時間が無い!!!!!!

俺は窓から外へ飛び出し、中庭を抜けて門前へと来た。

「おい美鈴!!!!!!」

「ね、寝てませんよ!!!!ってあなたどうして紅魔館から出て来たんですか?」

「お前が寝ている隙に入った。それから咲夜さんにこの事をバラされなくなかったら一つ頼みを聞いてくれ」

「内容によりますがわかりました」

美鈴はこれからどんな仕打ちを受けるのか若干怯えながら生唾を飲んで。

「簡単な事だ、妖精メイドでも咲夜さんにも誰でもいい、『今日中には多分戻る、服は昨日使った部屋に置いてといて下さい』と伝えてくれ」

「わかりました。えっと」

「鬼澤颯だ、宜しく紅美鈴」

「ほう……私の名前知ってるんですか？……凄く嬉しいです……」

中国がデレたwww

らしくないwww

「因みに俺見てのとおり紅魔館の短期執事だからよろしく美鈴先輩」

当然、次に入るときのための口実だ。

「はい！！お気を付けて！！」

よし、美鈴は完全に騙せた。

俺は紅魔館を後にし空を飛んだ。

「湖発見！！？発見！！目標を駆逐する！！」

高度約500m、眼下に映る日本じゃまず見られないであろう素晴らしい景色の中、紅魔館から数百m離れた場所にかなり大きな湖を見つけた。

千里眼により湖の上で無邪気に戯れているチルノ、ルーミア、大妖精を発見し、俺は一直線に飛んでいった。

「やっぱりあたいたらさいきよーね」

「そーなのかー？」

「チルノちゃん、カエルさんを凍らせちゃ駄目だよー」

上からチルノ、ルーミア、大妖精。

どうやらチルノは蛙を凍らせて遊んでいたようだ。大妖精がオドオドしながら止めようとしている。

「くおおおらあああ！！蛙を凍らせて遊ぶんじゃない！！！！」

「うわっ！？」

「へ？」

「そーなのかー」

俺はチルノに向かって突っ込み、手を抜いたラリアットをかました。

「なにすんのよさいきょーのチルノさまに向かって！！！！」

体勢を崩したチルノをすぐさま羽交い締めにした。

「うっせ？、っと…大妖精、聞きたい事がある」

「ふえ？」

「そーなのかー」

「一名無視！！多分ループするから。」

「あんた大ちゃんに変なことしたらムグウ！！」

「俺は鬼澤颯、怪しい者じゃない。  
ミステリアを捜してるんだが何処に居るか判るか？」

「喧しい？の口を塞ぎ、話を続けた。」

「うーん……ミステリアちゃんなら今日の夕方に屋台出すって言う」

てたから多分今は準備中だと思います」

「そっか、ありがとな。」

その準備してる場所はわかる？」

「ここから北に行った場所に人里が有るんですけどその近くの筈です」

「わかった、ありが」

「ぶはあ、スペルカード発動！！【氷符】パーフェクトフリーズ！！」

羽交い締めに行っている？の口に当てていた手を緩めた瞬間、ポケットからスペカを取り出し一瞬で発動させやがった……

「ちょ……おま……」

でも分解www

所詮？だ、やはりeasyレベルのスペカしか発動しなかったwww

多量の氷塊をばらまくチルノ。当然当たる前に籠手の能力で分解した。

「いずれまた会おうチルノよ!!」

俺は隙を見計らって携帯の瞬間移動を使い、『人里』と入力し、転移した。

「消えた!？」

「そーなのかー」

一瞬で周囲の景色が変わり、賑やかな商店街に変化した。

「あんた今いきなり現れなかったか!？」

流石に道行く人に見られたらしい、若干不味い。

「透明になるマジックですよ」

「魔法使いなのかあんた!！」

話しかけてきたのは中年の鉢巻きをしたオサーンだ。  
「ここは嘘をついとこじつ。」

「そつだが?」

「ちょっと手伝ってくれないか？お駄賃は払うから」

「何を？」

「いやあ、実は俺大工やってる茂野しげのって言うんだが木材が不足して困ってるんだ……」

「俺にどうしろと？」

「魔法かなんかでちょちょいっと木材を出せないかね？」

ふーむ、俺にゴミを木に換える力は備わっていないのだが……

携帯を取り出し、武具の召喚を起動した。

分類 杖

強度 俺が消えると言うと存在が消えるがそれ以外では破壊不可。

能力 持っているだけで魔法により木を生成出来るようになる。

出て来たのは言うなればただの太い枝。葉は着いてないが……

「場所は？」

「こっちだ」

俺はオサーンの案内の下、作業場まで来た。

「ん？茂野、その小僧は？」

「失礼な事言うんじゃないねえ！！この人は魔法使いだ！！足りない木材を出してくれるそうなんだ」

「そいつぁ助かる!!」

「いくらくれんの?」

「そうだな、杉の木を元の形のまま400kg出してくれ。そして  
ら10万円出そう」

(ぶん……いくら魔法使いと言えど原型のままですんなり無理だ  
ろう)

「10万ね、ok」

俺は杖(枝)を右手に、作業場の空いている空間に意識を集中させ  
た。

すると地面からニョロニョロと一本の木が生え、どんどん大きくな  
った。

「これでいいか?急いでるから早くしてくれ」

「すげえ!!」

「なっ!?!」

茂野さんは事務所のような場所に入り、封筒を持ってきた。

(バカな……言の葉も無しに杉の木を生やしたと!?!それも立地条件の悪いこんな場所に!?!)

それを受け取り、中身を確認した俺は一気に空高くまで飛び、千里眼を使った。

「おお……漸く見つけた……愛しのミステリア」

千里眼で人里周辺を隈無く探すと、屋台の前で何かをしているミステリアの姿があった。

俺は一直線にそこへ飛び、ミステリアの真後ろに着地した。

「ミステリア……」

「っ!？」

いきなり声を掛けられ、肩をビクッとさせ驚きながらミステリアは振り返った。

「誰……ですか？」

「俺は……鬼澤颯……えと……」

「ごめんなさい、屋台は夕方からの」

「そうじゃない……その……」

「？」

「ミステリア……俺と結婚してくれ……」

「はい？」

「ハッ……つい本音が……」

くそ……これで嫌われたらどうする……？過去の俺を殴ってやりたい  
……！！

「クスッ」

「……！！？」

笑われた！！マジどうすんだよ！！この状況！！

「こんな私を好きになるなんておかしな人ですね……私、妖怪なのに」

「そんな事は知ってる。夜雀の怪、ミステリア・ローレイ……だろ？」

「それを知ってるのにどうして私なんかを好きになったの？」

「えっと……それは……心からミステリアに惚れてるから……だ」

言ってるて恥ずかしい。

顔から火炎放射できんじゃないね？

「でも私…人間と…って…どうなんだろ…?」

「すまん、さっきのは」

「こんな私で良ければ…でも…いきなり結婚は…」

「な、なら!!友達からでいい!!いきなり出会い頭に言われても困るセリフだったろうし!!」

「友達…」

「ああ!!えと…駄目すか?」

「わかった」

「ありがとう」

(ヨッシャアアアアア)

どうにかミステリアと関係を持てた!!今なら死んでも……いや、まだ早い!!

「あっ、それ手伝おうか？」

「えっ?いいの?」

遠くからだったからわからなかったがどうやらウナギに串を刺していたらしい。

下準備ってやつか。

「じゃあそこで手を洗って来て」

「おう………あっ、そうだ消えろ!!」

消すのを忘れていた杖を消し、俺はミステリアに指さされた屋台に備え付けてあるボトルから水を出し、籠手を外し、置いてあった石鹸を使い、手を綺麗にした。

「じゃあこの捌いてある八目鰻に4本串を刺して？私は下焼きするから」

「了解した」

言われた通り鰻に串を刺していき、作業すること1時間。

だいたいの下準備中が終わり、現在3時頃だ。

ミステリアが焼いた八目鰻を手伝ってくれたお礼として一枚くれた。

「うまつ！！特にタレが美味しい！！」

「あっ！…山椒使う？」

「いや、そのまま大丈夫」

素でうまくいった……

「まだ結構時間あるけどどうするんだ？」

「うーん……いつも時間は余らないから……どうしようかな……」

ふむ、どうやら暇なようだ。

そっだ、今更ながら追加されたアプリとやらを見ようか。

「どれどれ……」

強化されたアプリ

十 弾幕切り取り機能

100回連打を改善し、10秒間決定長押しで一枚撮れるようになる。ただし長押ししている最中は動きが鈍る。

低速移動化ですね…わかります。

追加されたアプリ

十 簡易式一軒家機能

このアプリを起動するとペンが出てくる。そのペンで地面に範囲を描く。その範囲から適合した一軒家を瞬時に建てる。

正直、パナい。

十四次元ポケット機能

今までに生成した武器を四次元に収納することができる。出し入れ自由。

ドラ○もん乙ww

十破壊のゴミ箱

今までに生成した壊れない武具を上書きして破壊する。

要は使い飽きた武具を消せるわけか。

以上だけらしい。

いやあゝ神の力すばらしいっす。

俺はさっそく4次元ポケットを使い、籠手と眼鏡を収納した。

「それってケータイって言う機械だよな？」

「何で知ってるんだ？」

「以前、夜の屋台に天狗が二人来て確か『姫海棠はたて』って天狗が教えてくれたの。色は違うけど形が似てたから」

「ふむ、是非ともメル友になって頂きたい……いや…待て、念写でプライベートフォルダの画像を撮られたら……」

俺は神にメールし、念写耐性を希望した所、既に掛かっているとのこと。

「流石神www用意が良すぎるwww」

兔に角暇だ……

うつむ…ゲームが無いとやることに困る…

折角ミステリアと二人きりなのに……ん？

急激に心臓が鳴り始めましたよ。ええ。

「どづしたの？顔色が真っ赤だけど…？」

「べべ別に何でもない！！」

一方でミスティアは何か紙見てるし。

「何見てるんだ？」

「な、何でも無いよ！！」

気になる。俺は眼鏡を取り出し、千里眼で覗き見してみた。

「歌詞か。いい詩じゃないか」

「な、何でバレたの!？」

「実はこの眼鏡、透視機能が付いているのだよWWW  
だからみすちーの服の下も……」

「きゃあああ!？」

「冗談だよWWW」

そう言っつて目を逸らす俺。

ミステリアの照れ顔とか破壊力テラヤバす!!

「もう、颯さんのえっち」

「

」

今なら死んでいい。

てかその台詞駄目www

色んな意味でNGだわwww

「その歌詞ミステリアが考えたのか？」

「えと……そうだけど……」

「プリズムリバー三姉妹に頼んで作曲して貰えば？普通にCD出せるレベルだと思うけど……」

「しーでいー？」

「CD無かった。兎に角名曲になりそうって事」

「あ、ありがとう／＼／」

照れるなつて。目を逸らさないと俺が死んでしまつwwww

「しかしこうもやる事が無いと暇だな」

「夕方になるまでまだ1時間ぐらい有るしね」

「むう……」

結局何をするでもなくミステリアと暫く話し気付けば日が沈みそつ  
になっていた。

「そろそろお店開けなきゃ」

ミステリアは屋台を後ろから押し始めた。

が、当然俺はミスティアをどけて屋台を押す。

「そんな…悪いしいよ…」

「気にするな。俺が好きでやってるんだ、礼も要らない」

「優しいんだね」

「ミスティアにだけな」

「んーん、何か他の人にも優しくそうな気がする」

「そつでもないさ、俺は嘔吐きの臆病者だし」

「優しいに加えて謙虚なんだね？」

ミスティアの楽しそうな笑顔に、俺も自然と頬が緩んだ。

そして人通りが若干多い人里の通りに来ると、車輪を固定し、炭火で鰻を焼き始めた。

ものの数分で数人の行列ができ、みるみるうちに鰻は売れていき、6時には全て鰻は売れてしまった。

「凄い人気だな。確かに旨かったから解るけど」

「でも最近八目鰻の数が減ってきてるからちょっとピンチなんだ」

「取り過ぎは良くないしなあ」

「違うの。前は私や他の人が取り続けていたけど個体数が減らない程度だったの。だけどここ最近湖や川の鰻がやけに早い速度で誰かが大量に取ってるみたいなの」

「成る程ねえ」

そいつを探し出してお灸を据えてやる。

「今日も売れるのが早いな」

「どうも妹紅さん」

「もこたんキター!!」

突如現れたもこたん!!  
ナマもこたんWWW

「誰だお前？」

「失礼、俺は鬼澤颯、ご機嫌麗しゅう藤原妹紅さん」

「こりゃ、丁寧にどうも」

「今日はもう売り切れです。すみません」

「まあまた今度でいいや」

「明後日は居酒屋として湖畔の近くに開いてるんで良かったらどうぞ」

「そいつはいい。慧音と一緒に飲みに行くよ」

そう言い残して妹紅は立ち去り、俺はミステリアと一緒に屋台を方付け始めた。

「何から何までありがとうね」

「だから気にするな、俺が勝手にやってるだけだって」

「そうだったね」

俺はふと思った。

ミスティアは何故今日会ったばかりの俺にこんなに打ち解けてくれたのだろうか……

いや、けしかけたのは俺だが……

その事をミスティアに尋ねると意外な理由を教えてくれた。

「私……そんなに友達とか気軽に何でも話せるような人も妖も居ないから少し嬉しかったの。」

「そりゃあ常連のお客さんも居るけどあくまで人付き合いだったから……」

「そうか……チルノとかは仲が良いんだろ？」

「まあ仲が良いと言えばそうなるけど実際チルノちゃんの無茶に振り回されてるだけな気が……」

「それ言ったら大妖精の方が苦勞人な気がする」

「あはは……そうだね。  
でもよく知ってるね？」

「幻想郷に住んでる力ある者達の事は大方知ってる。特にチルノとかは三月精の自機キャラとして優秀な能力を發揮してたし」

「自機キャラ？」

「まあこの世界で言うゲームとはまた違う感じのゲームなんだけど……携帯じゃ出来ないしなあ」

「へえ。ゲームなら香霖堂におかしなゲームがいっぱいあったけど……」

「あの禪眼鏡には気を付けろよ？平気で幼女を襲う変態だからな」

「霖之助さんが？」

「そうだ、特に博麗神社での宴会では気を付ける」

「いつも魔理沙に無理やり酒吞まされて直ぐに酔いつぶれてるから」

大丈夫だよ」

「ならいいが……」

俺とミスティアは話しながら屋台を動かせる状態にした。

そして俺が屋台を押しながらミスティアについて行っているとミスティアが唐突に止まった。

「どうした？」

「困まれています」

「……………」

俺は無言で携帯の四次元ポケットから籠手、眼鏡を取り出し、装備した。

そして千里眼で周囲を探ると狼の一群のど真ん中に俺とミスティア

が居ることに気付いた。

「わり、気付かなかった」

「問題ないよ、行く？これ以上暗くなったら夜目の効かない人間じゃ危ないし」

「暗視スコープ創ればおk」

「あんしスコープ？」

「どんなに暗い場所でも見えるようになる眼鏡みたいな物だよ」

「人間にとっては便利なんだろうね」

ミステリアは普通に歩いて進んでいる。

その間、千里眼で様子を伺っていた狼達が地面でのたうち回っているのが確認できた。

「鳥目の能力か」

「ほんと、何でも知ってるんだね」

「まあな」

視界を奪われた狼達は混乱し、俺達を襲う所じゃないらしい。

素通りし、そのまま歩くこと約10分、林の中に一軒の家があった。

「ここまでありがとう」

「ここがミスティアの家なのか。意外としつかりした家だな」

「意外って何よ？」

ミステリアは頬をぷくと膨らませて怒った素振りを見せた。

無理、直視できないWWW

「颯はどうするの？」

「紅魔館に行かなきゃな。服を置いてきてるんだ」

「そっなんだ……」

「また明日来るよ」

「うん。またね」

ミステリアは屋台を家の横に置くと家に入っていった。

俺は紅魔館へ戻るべく空へ飛翔した。

短期執事だと！？またミステリアに会う機会が……

俺は無事何事もなく紅魔館の門前まで飛び、着地した。

「お帰りなさい」

「おう美鈴先輩。起きてましたか」

「し、失礼ですね……」

「悪い悪いwwじゃ頑張ってたな」

門を通過し、紅魔館に入ると咲夜さんが出現した。

「今まで何処に行ってたんですか？」

「まあちよいと野暮用で。何か用か？」

「服は部屋に置いておきました。それとお嬢様がお呼びです、広間へ行って下さい」

「目を覚ましたのか」

「はい、妹様も。では私はこれで」

「待ってくれ！！広間が何処にあるか解らない」

「仕方ないですね。では着いてきて下さい」

俺は咲夜さんの案内により広間前まで来た。

「では私はやらねばいけない事があるので」

咲夜さんは一瞬で姿を消した。

俺は扉をノックした。

「俺だ」

「入って」

言われた通り扉を開けた瞬間、腹部に走った衝撃により俺は1m弱吹っ飛ばされた。

「ぐ…苦しい」

「遅いよお〜お兄ちゃん!!」

扉を開けた瞬間に走った腹部の衝撃はフランによる抱きつき攻撃だった。

「起きれないから退いてくれフラン」

「えへへ、やだ」

「俺はレミリアと話があるんだ、後でいくらでも付き合っ  
てやるから今は退いてくれ」

「むう………わかった」

渋々といった様子でフランのなかなか強い腕力から解放され、立ち上がった。

広間へ入り、椅子に座るよう促された。

近場の椅子に座り、話を聞こうとしたその時、膝にちょこんとフラン  
が座ってきた。

正直、フランのデレが半端じゃないwww

「何の用なんだ？」

「ただ、お礼を言いたいただけよ。今日は…フランと仲直りするきっかけを作ってくれてありがとうね」

「まあ礼を言われるほどの事じゃない、欲で行動したまでだ」

「なんの欲よ？」

「そいつは言えない。まあ強いて言い換えるなら俺が幻想郷で生きるため…かな」

「よくわからないわ。あなたの事が。何せ運命が見えないのよ」

「やっぱりか、幻想郷の外の世界の運命は見透かせないみたいだな」

「外の世界？」

「まあいい。話は終わりか？」

「私に出来る事があつたら何でも言つて。恩返しの一つも出来ない  
と紅魔館の主としての恥だし」

「そうだな、一つ聞きたいんだが」

「何でも答えるわ」

「フランを幽閉した理由は……やっぱり八雲紫が絡んでるのか？」

「そうだけど何でそんな事知ってるの!？」

「まあ気にするな。それとフランの事だが……多分、俺が分解した  
狂気は…一時的な物だと思ふんだ」

「どっしりして……?」

「ストレスが溜まればまた再発するってことだ。  
根っこから分解したらそれこそフ란の人格まで影響しちゃう。  
これ以降ストレスかなんかしらのきっかけで発狂するかも知れない」

「成る程」

「対策としてはストレスとかを溜め込ませないかあるいは俺が微弱な狂気を分解し続けるかだな。  
もっとも後者は何よりフ란が望まないだろうから」

「あら？なら問題ないわね」

「何がだ？」

「だって、兄妹でしょ？  
ずっと一緒じゃない」

( ^ ^ ) ギクウ

しまったああああ……！！！！  
すっかり忘れてたあー！！

ヤヴァイ……余計なフラグ建てすぎた………

「それが嫌ならいつそ紅魔館の執事になれば？」

「悪いが俺は不定期にこの世界から消えたり現れたりする存在だ。  
今日から一週間後、消える。次にいつ現れるかなんて想像もつかない」

「随分と不安定な存在なのね」

「連絡を取る方法はある。  
妖怪の山に住む姫海棠はたてっつて言う天狗に頼めば会話ぐらいは出来る」

「知らない名ね」

「射命丸文に聞けば分かる筈だ」

「今度焼き鳥にするって言って脅してみるわ」

「ははは……程々にな……俺はそろそろ部屋に戻りたいんだが……」

「じゃあこれは恩を仇で返した罰、一週間の短期執事になりなさい」

美鈴に言ったことが本当になるなんて……

拒否なんか出来るはずもなく……

「わ、分かった」

「では戻ってよろしい!!」

クソッ、レミリアのドヤ顔が心に染みるぜ……

俺は席を立とうとして膝に居座っているフランを見る。

「えと…部屋に戻りたいんだけどフランちゃん」

「ええ！？何で!？」

「いや…あの…」

「後で遊んでくれるんじゃないの!？」

俺……アルツハイマーかもしれない…

すっかり忘れてた…

「わかったわかった、俺かなり腹減ってるから夕飯食べてからでいいだろ？」

「お腹減ってるの？じゃあフランと一緒にご飯食べよう。」

「食べてなかったのか？」

「うん」

一向に退く気配の無いフランをお姫様抱っここで持ち上げ、厨房へ向かった。

厨房には咲夜や他の妖精メイド達が居て、夕飯準備の真っ最中だった。

「あとどれぐらいで出来ますかね？」

「残り4分23秒です」

細かいなおい。

しかし流石咲夜さんだ。

目にも止まらぬ早技で次々に料理を作っていて。最早神レベル  
www

「と言うわけで広間に戻っていて下さい。お嬢様は貴方にも夕食の  
席を用意しても良いと仰ったので」

なんか理由付けられて追い出されたよ。

忙しいみたいだからほっとくか。

「広間に戻りたいんだが……」

此処までの道のり忘れましたwww

結局フランクの指示で右へ左へで広間に到着した。

この館、広杉です。

広杉とか誰だwww

「どうやら咲夜に追い出されたようねwww」

「分かってて行かせたな？」

「なんの事かしら？」

畜生！！レミリアは根っから意地悪な奴のようだ！！

その後フランをなだめ、どうにか隣の席に座って貰う事で妥協し、カートに乗ってきた夕飯を頂いた。

「いやあ……これ旨いっすね」

「それはガゼルのステーキです」

ガゼルって食べるんだ、初めて知ったよ。

まあ鹿っぽいし平気か。

レミリアとフランに限っては赤い料理しか食ってないし。

やっぱり血の色だよな……アレ……

「食後のデザートと16年物のテキーラです」

俺未成年なんだけど……

まあどこぞの巫女も常識に捕らわれてはならないとか言ってるしいか。

俺は人生初の酒とショートケーキを楽しんだ。

「意外にサクサク飲める物なんだな」

「あんた酒に強いのかしら……常人なら2〜3杯で結構酔っただけどそれ何杯目？」

「そうなの！？グラスで8杯目なんだけど……」

ラベルを見せて貰うと度数52と書いてあった。

「52度って高いのか？」

「ねえ様、お兄ちゃん酔わないよ？」

「ここまで酒に強いなんて計算外ね、下手したら喉が焼けるレベルなのよ」

「は？それって……」

「ねえ様がお酒で酔っぱらってたら何しても明日には忘れてるって言ったのに」

「明日レミリアの命日だね。うん」

「じよ、冗談よ！！冗談！！」

流石に身の危険を感じたのか慌てて弁明するレミリア。

「どつしよつかな〜レミリアが意地悪するから紅魔館から出て行っちゃおうかな〜」

「ね・え・様・？」

「こつこつ事続けるとフラン発狂すんじゃないね？」

「【禁弾】……スターボ」

「わーわー！もう意地悪しないから許してスペルカードを仕舞いなさい！！」

「本当にい？」

「ち、誓うわ」

「安心しろ、用事で出て行く意外、一週間はここに居るから」

「わかった」

流石、最終鬼畜妹フランｗｗ

コワイコワイｗｗ

俺は食べ終わったので部屋に戻ろうとしたその時、怪力で腕を掴まれた。  
やっぱり逃げられないよね〜

「フランの部屋に行ってるから。食べ終わったら一緒に遊んでやるよ」

「ウソ吐いたら怒るよ?」

渋々といった様子でフランは俺の腕を放した。

嘔吐いたら死にそうなので俺は地下にあるフランの部屋へ向かった。

地下へのルートは覚えていたので、普通に到着した。

「そっぴや地下2階って行ったこと無いな」

フランの部屋は地下1階にあり、さらに降りる階段があった。

興味本位で降りると古びた木の扉があるのみだった。

「大丈夫かな」

木の扉を押し開くとそこは倉庫になっていて、ワイン瓶や酒樽などが所々にあった。

「埃臭いな……」

俺は木の扉を閉め、階段を登った。地下1階にはフランが既に来ていた。

「下で何してたの？」

「何かあるのか気になったからちよいと覗いただけ。酒しかなかったが…」

「あそこには……お酒だけじゃなくて……もっと怖い化け物が居るんだよ？」

「化け物？」

「そんなことよりフランと遊ぼう？何して遊ぶ？」

化け物？あそこには埃を被った酒樽とか酒瓶しかなかったように見えるが…

兎に角触れてはマズそうなのであえてスルーすることにしよう。

「トランプとかあるか？」

「とらんぷ？何それ？」

どうやら幻想郷にはトランプは存在しないらしい。

「色んな遊びが出来るカードだよ」

「面白そうだね」

「面白いんだよ」

俺は携帯の武具生成機能で、できるかは解らないがトランプの生成を試みた。

名称 トランプ

分類 カード

強度 ただの厚紙

能力 いかさまが出来ない

使用后自動シャッフル

無くなっても集まってくる

枚数 j o k e r 2枚含む一式

どうやら成功のようだ。

トランプがバラバラと床に落ちた。

ケースぐらい用意しろよ…

落ちたトランプを裏表の統一をしながら一束にまとめた。

「これがとらんぷ？」

「そうだ。2人で出来るゲームはポーカーとか七並べとか…ブラックジャックぐらいだな」

「ブラックジャック？お医者さんの？」

「何故知っている！？」

「パチユリーの図書館にあったよ？確かまんがって言う絵本の中に」

よし、暇なときは図書館に行こう。すげー気になる。

「で、何する？」

「じゃあブラックジャックー！」

「ルールを説明するぞ、トランプを2枚以上引いて描かれている数

字の合計がより21に近い方が勝ち。因みにAは1でJが11、Qが12、Kが13だ」

「わかった」

俺はフランとの間にトランプの束を置き、交互に2枚引いた。

持ち手はダイヤのQとハートの6。

出だしは18だな。

この時点だと3を引けば勝てるが……パスだな。

「まだ引いて大丈夫そうだったら引いて良いぞ？ただしオーバーしたら負けだからな？」

「えーとKが13だから……もう一枚引くね？」

フランはどつやらKを持っているらしい。3枚目のカードを引いた。

「21だよね？」

「そつだ」

「ピッタリだよー!!」

なん……だと……？

互いに手札を公開すると、フランはスペードのK、ダイヤのA、クローバーの7だった……

「凄いな」

「えへへ〜」

「どつするっ、もう一回やるか他のにするか？」

「うっん……じゃあさっき言ったポーカーってやつ」

「ポーカーか、役を覚えないと始まらないしなあ……」

俺は一通りフランに役とルールを教えた。

意外にも早く覚え、すぐにやることになった。

「じゃ配るぜ」

交互に5枚配り、持ち手を見る。

スペ5、スペ2、クロ4、クロ5、クロ8。

このままだとただのペアだな。

「さっきも言ったとおり、要らないカードは一度だけ一旦山札に戻して引き直す事ができるがどうする?」

「うん…3枚かな」

「わかった」

俺はスペード2枚を山札に戻し、フランに3枚、手元に2枚置き、山札に戻した。

結果、スペ8、jokerが手札に加えられ、俺の役はjokerを8に換える事で、トリプルになった。

「そいじゃあ見せ合つか」

「えっとぶるはうす?」

フランの手元にはハートA、クロA、クロ9、ハート9、joke  
「があった。」

「ははは!!--また負けちまった。フランは強いなあ」

「い、ごめんねノ」

「いやいや、負けは負けだ、俺の運がなかったただけだしな」

「他には無いの?みんなのできるゲームとか」

「沢山あるぜ?広間に行ってみるか?」

「うん!!--みんなで遊びたいし」

俺とフランは広間へ向かい、扉をノックした。

「入っていいか？」

「どござ」

広間へ入ると、夕食を食べてるパチュリーと小悪魔と美鈴が居た。

「うわ！！パチュリー様気を付けて下さい！！あの人の変態ですよ  
！！！」

早速フラグ建てやがってえー！！！！！！

「変態？」

「ご、誤解だ！！あれは不慮の事故で……」

「私の使い魔、高いわよ？」

「ちょ、パチュリー様！！」

今日は調子が良いのだろうか？パチュリーはクスクス笑っていた。

「夕飯食べ終わってからでいいからトランプって言うカードゲームしないか？」

「トランプを持つてるの？」

おや？パチエさんはトランプを知っているようだ。

「前に本で読んだわ。外の世界にある遊戯道具と書いてあったわ」

「正解。美鈴もどうだって……顔色悪いぜ？」

「……ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい……」

うわー！！ひぐらし化してる！！

「居眠りしてるところを咲夜に見つかったらしいわ」

「成る程、可愛そうに」

美鈴には不戦勝でいいか。

俺とフランは会話しながらパチュリーと小悪魔が食べ終わるのを待った。

パチュリーの管理している図書館にはかの有名なスキマババアが外から本を持ってきて置き場になっているらしい。

「だからブラックジャックとかあったんだ…外から万引きしてんのかあのババ………」

誰力ナ？僕ノ首ヲ絞メテイルノハ？

後ろには正真正銘八雲紫が隙間から上半身だけのぞかせていた。

「今誰のことをババアって言おうとしたのかしら？」

ヤバい、首からギリギリって音がしてる…

死ぬwww……

「まさか、紫様の事なわけじゃないですか」

「それは良かったわ」

いつか絶対に報復してやる！！覚えておけ隙間ババアめ！！

まさかのデュエル！？【八雲紫戦】（前書き）

どうも、作者です。

この章はリア友からのリクエストで作ることになった章です。

度々こんなことが続かなければ良いんですが……

まさかのデュエル！？【八雲紫戦】

「知らないの？私少しなら心も読めるのよ？」

解放された首が再度絞められそうになった瞬間、フランが紫の目前にレーヴァテインを構えた。

「お兄ちゃんをいじめると…フラン怒るよ？」

「待て待て待てフラン！！俺とゆかりんは仲良しだからじゃれてただけなんだ！！虐められてたわけじゃない！！」

「はぁ？何言ってる」

（空気読め！！フランが発狂したらどう責任を取る！？）

「ふん！！あんた外人よね？」

「そつだ」

外来人とは幻想郷の外からやってきた者の事を言います。

「出身は？」

「日本だ」

「なら遊戯王は知ってるわね？」

「一応プレイヤーだが…」

「そつ。ならデュエルよ!!」

はあ!?!いきなり何だ!?!

「私に勝てたらさっきの発言、聞かなかった事にしてあげるわ」

「む…ゆかりんとは仲良くしたいし……いいだろう、ちょっと待ってる」

ノリでデュエルすることになった俺は携帯の武具生成機能で生前使用していたデッキと全く同じものを生成した。

そして戦いが始まった。

「デュエル!」

先行は紫。

「ドロー。異次元の女戦士召喚、カードを2枚伏せてターン終了」

恐らく次元帝だろうな。

紫だしwww

「俺のターン、ドロー!!」

手札

サイクロン

コアキメイルドラゴ

仮面竜

王宮のお触れ

未来融合フューチャーフュージョン

氷眼の白夜龍

「俺は未来融合を発動、対象はF・G・D。デッキからブリザード

ドラゴンを2枚、レッドアイズダークネスメタルドラゴン、紅眼の飛竜、ミンゲイドラゴンを墓地へ送る」

「ドラゴンデッキね」

「俺はカードを2枚伏せ、コアキメイルドラゴ召喚！！異次元の女戦士へ攻撃宣言！！」

「異次元の女戦士の効果、コアキメイルドラゴと異次元の女戦士を除外するわ」

紫LP7600

俺LP8000

「ターン終了！！」

「私のターン、ドロー。手札から異次元の偵察機を召喚。ダイレクタアタック」

紫LP7600

俺LP7200

「ターン終了」

「俺のターン、ドロー!!!、スタンバイで未来融合のカウント1」

手札

仮面竜

氷眼の白夜龍

ホルスの黒炎竜LV4

場

表、未来融合

裏、王宮のお触れ

裏、サイクロン

「俺は何もせずにエンドフェイズ、墓地の紅眼の飛竜を除外しレッドアイズダークネスメタルドラゴンを特殊召喚！！ターン終了」

「私のターン、ドロー。異次元の偵察機を生け贄に光帝クライス召喚！！効果によりレッドアイズダークネスメタルドラゴンと右側の伏せカードを破壊！！」

サイクロンとレッドアイズダークネスメタルドラゴンが破壊された代わりに俺はデッキからカードを2枚ドローした。

因みにクライスは召喚したターンには攻撃できない効果がついている。

「ターン終了よ」

「俺のターン、ドロー！！」

手札

仮面竜

氷眼の白夜竜

ホルスの黒炎竜LV4  
融合呪印生物 闇  
ドレッドドラゴン  
禁じられた聖杯

「スタンバイ時にEXデッキよりF・G・Dを融合召喚！！メインフェイズ、俺は手札から仮面竜を召喚しカードを一枚セット、FGDでクライスに攻撃！！」

「残念、ダメージ計算時、手札からオネストの効果発動、攻撃力+5000で7400！！FGDは光属性の戦闘では破壊される！！」

紫LP7600

俺LP4800

「ぐっ……ターン終了」

「エンドフェイズ時、リバースカード発動、異次元への隙間発動！  
！属性は闇！！」

「悪いな、チエーン、王宮のお触れ。処理順から無効だ」

「ちつ 私のターン、ドロー。手札からゾンビキャリアを召喚、LV6、光帝クライスにLV2、ゾンビキャリアをチューニング！シンクロ召喚、スターダストドラゴン！！」

「次元帝じゃないのか？しかし偵察機は一体……」

「悪いわね、次元帝では無いわ。スターダストドラゴンで仮面竜に攻撃！！」

紫LP7600

俺LP3700

「仮面竜の効果によりデッキから神龍ラグナロクを特殊召喚！！」

「ターン終了」

「俺のターン、ドロー」

手札

氷眼の白夜竜

ホルスの黒炎龍LV4

融合呪印生物 闇

ドレツドドラゴン

死者蘇生

「勝ったな」

「へ？」

「手札より死者蘇生を発動！！墓地よりレツドアイズダークネスメタルドラゴンを特殊召喚！！手札から融合呪印生物闇を召喚し効果発動！！融合呪印生物闇と神龍ラグナロクを墓地に送り竜魔神キングドラグーンを融合召喚！！レツドアイズダークネスメタルドラゴンの効果で墓地からブリザードドラゴンを、キングドラグーンの効果で手札から氷眼の白夜竜をそれぞれ特殊召喚！！」

場

レッドアイズダークネスメタルドラゴン

竜魔神キングドラグーン

ブリザードドラゴン

氷眼の白夜竜

「バトル！！氷眼の白夜龍でスターダストドラゴンを攻撃！！」

紫LP7100

「禁じられた聖杯発動、対象はブリザードドラゴン。ブリザードドラゴン、キングドラグーン、レッドアイズダークネスメタルドラゴンでダイレクト、トドメだ」

合計7400ダメージ。

「ま、負けた……」

「約束通りさっきのは忘れてくれ」

「まあいいわ、許すとしましょう」

「お兄ちゃん強いね！！ほんとにはさっきフランに手加減してたんじゃないの!?!」

フランが目をキラキラさせながら聞いてくる。

「言えない……アレがただの運ゲーだなんて……」

「いやいや、フランの勝ちだよあねは。で、本当は何の用事なんだ紫」

「そうね、とりあえずアナタ誰？」

そっからかよ！！知らない人とデュエルしたんですかあんたは！！

「そつよ悪い？」

「俺は鬼澤颯。よろしく八雲紫」

「よろしくね」

紫はそれだけ言つと隙間の中に消えた。

「フラン、済まんが小一時間待っててくれないか？」

「？」

「後々俺と連絡出来るようにするためだ」

「どこかに行っちゃおうの？」

「ああ。俺もどこへ飛ばされるかわからないが……その世界の悪い奴を倒したら戻ってこれるんだ」

「なら我慢する」

「悪いな、パチュリーと小悪魔もここに居てくれ」

「しょうがないわね」

「分かりました」

携帯を取り出し、瞬間移動機能を起動し、姫海棠はたての家の前と入力して決定を押した。

転移先の通りには誰もおらず、寝静まっていた。

「天狗は寝るのが早いのか？」

時刻は夜10時、人間ならまだ起きていてもおかしくない時間だ。

目の前には【姫海棠】と札のある立派な一軒家があり、灯りはついていた。

取りあえず扉をノックしてみた。

意外な事に直ぐに出て来てくれた。

「えっと……誰？」

「姫海棠はたて……頼みがある」

「人間！？どうやって里に……それよりも頼みって？」

俺は無言で携帯を取り出した。

「携帯を持ってるってことは……外来人？」

「そつだ。アドレス帳に登録しといてくれ。俺は鬼澤颯、現在紅魔館の執事をやってるんだが……」

俺は事の次第を全て話した。

現れたり消えたりする存在だと言っこと。

消えた時の連絡手段が携帯しか無いこと。

等々。

「別にいいわよ」

「本当か！？助かる」

「しっ……あんまり大きな声出さないで。本来椀の目に見つからないこと自体奇跡に近いのに騒いだら見つかるわ」

「そうだな」

赤外線通信でお互いのプロフを交換した。

## 厄神様と芥川龍之介の河童

「でもあんた別世界に行くんでしょ？普通に考えて電波通じない？」

「その点は大丈夫だ、俺の携帯は世界を無視できる。要は圏外にならない」

「ふうん。そうだ、仲介人になってあげる代わりと言っては難だけど……明日歩いて妖怪の山を登ってここまで来てくれない？」

「別にいいが何時頃だ？」

「じゃあ12時ジャストに登り始めて」

はたての意図が解らないが断る訳にはいかないだろう。

疑問に思いながらも承諾した。

「邪魔したな、俺は帰る」

「あそ。じゃあ明日に会いましょう」

俺は瞬間移動で紅魔館の広間へ転移した。

「わっ！！びつくりした」

「悪い悪い。それと明日用事が出来た、今日は早く寝たいからワンゲームな」

「わかった」

「じゃあ何する？無難にババ抜きとか？」

「4人なら確率的にいい具合ね」

そうか、パチユリーはトランプのゲームを知っているのか。

「じゃババ抜きだな。ルールはjokerを最後に持っていた人が負けで手札が無くなった順に勝ちだ」

「なんか簡単だね」

「いやいや、意外と奥が深いぜ？」

俺はjoker一枚を除いたトランプの束を4等分し、全員に配った。

「じゃあ始める。まずは同じ数字のカードが2枚あったら手札から2枚とも出してくれ」

「わかりました」

「ええと、これとこれかな？」

場には各自がペアのカードを出し、全て出し終わったところでゲームが開始された。

「じゃあ俺から時計回りにカードを取って行くから手札にもっているカードと同じ数字のカードを引いたら捨ててくれ」

順々にカードを引き合い徐々に枚数が減り始めた。

そして一番最初にあがったのはパチュリーだった。

「今回は運が良かったわね。じゃ最後の一枚をフランに渡すわ」

「あつ!」

ん? joker引いたか。

右から2枚目だな。

「じゃあフラン、パチュリーが外れたから俺はフランからカードを引かなきゃいかん」

「う、うん」

俺は右から2枚目のカードを引いた。

引いたカードがjokerだと思っていた時期が僕にもありました

w  
w  
w

いや物理的におかしいだろ！！物理の授業なんてまともを受けてなかったけど俺でもわかる、これは怪奇現象だ！！

フランはカードを一切入れ替えていない。つまりパチュリーから引いた最後の一枚がjokerじゃなかった以外には手札の順から引って確実にjokerになるはずだ。

「ハッ、もしか……」

イカサマが出来ない能力……なのか？

高性能杉クソワロタWWW

それ以外に可能性は無いな。

「どっかした？」

「いや、何でもない」

気付けば俺が引いたのはペアとなりうるカード。

そして残り手札が3枚で2枚減るから……上がりだ。

ついでに俺の手札にあるのがクローバーのA、小悪魔の手札が1、フランも1。とすると……

「あがり……ですね」

ヤバイこれでフラン覚醒のお知らせとか特にヤバイ……

「むう…今日は負けちゃったけど次やるときは絶対勝つからね!!」

発狂はしなかったようだ。怒ってはいるけど。

「おう。じゃあ片付けて部屋に戻るわ」

テーブルの上にあるトランプをまとめ、俺は広間から仮自室へと戻った。

「そっぴや寝間着が無いな……」

なんとなく部屋に備え付けてあったタンスを開いてみると何故か紺色のジャージが上下2セット入っていた。

「咲夜さん有難う御座います」

堅苦しい執事服からジャージに着替え、ベッドに入り眠りに就いた。

翌朝

携帯の目覚まし音が鳴り響き、俺は目を覚ました。

「目覚まし機能付いてたんだ……」

鳴り響く目覚まし音を止め、ベッドから這い出た。

「あと4時間暇だな」

とりあえずタンスから俺の着ていたTシャツとジーンズを取り出し、着替えてから部屋を出た。

「お、さつきゅん発見」

凄いデジャヴだ。咲夜さんが昨日の朝拭いていた窓を拭いていた。

「おはようございます」

「おはよう。てか紅魔館の窓全て毎日拭いてるの？」

「日課なので」

なんか……人として敗北した気がする。

迷うほど広い紅魔館全ての窓とかwww

1日かかっても無理な希ガスwww

「因みに何枚位あんの？」

「数えたことがないので解りませんね」

とどのつまり数え切れないほどあるわけですね、わかります。

「厨房に行けば朝食が有りますので良かったらどうぞ」

「んじゃありがたく頂いてきます」

咲夜さんに別れを告げ、厨房へ向かった。

「今日の朝飯は……スープカレーですか。朝から豪華だな」

厨房にあるテーブルに米とスープカレーを皿に盛り、あっという間に食べ終わり、食器を洗った。

「料理の腕もかなりのものだな。スパイスが絶妙過ぎる」

洗い物カゴに食器を立てかけ、厨房を出ようとしたとき、出入り口付近の床に血のようなものが垂れていた。

「凝固してないってことは……誰か怪我してるのか？」

厨房から廊下に出るとぼたぼたと血滴が続いていて、まるで後を追ってこいとも言っているようで気味が悪かった。

「厨房からいきなり血が垂れてるし来るときはこんななかだった……とすると入ってから気づかない内に誰かが抜け出ていった事になる……薄気味悪っ!!」

これ以上係わるのはよそう……ホラーは苦手だ……

血滴をスルーし、俺は広間へ向かった。

「誰もいないのか」

「誰か探してるんですか？」

「うおっ！？」

いきなり現れんなしwww

咲夜さんが真後ろから声を掛けてきたようだ。

「ちよいとレミリアを探していてね、所で厨房から血が垂れてって  
ただけどなんなのあれ？」

「血？ちよつと見てきますね。」

お嬢様なら多分お部屋に居るか？」

「レミリアの部屋どい？」

「お嬢様のお部屋は最上階の一室です」

それだけ言つと咲夜さんは消えた。

俺は最上階である4階へと登り、一部屋しかない部屋の扉にノックをした。

「俺だ」

「入っていいわよ」

レミリアの許可を得、扉を開いた。

「何か用？」

「実は今日妖怪の山に登らないといけないんだ」

「あつそ。精々死なずに帰ってきなさい」

「理由を聞かないのか？」

「どうせ物好きな天狗が面白半分で歩きで登ってこいと言ったんでしょ」

「そうか、邪魔したな」

「待ちなさい」

レミリアは俺を呼び止めると化粧台の引き出しから赤い石を持ってきた。

「これは？」

「ん〜……御守りとも思ってくれればいいわ」

「そうか、ありがとうな」

俺はレミリアから謎の赤石を受け取り、自室へ向かった。

「で、何でフランが俺の部屋に居るんだ？」

「ち、違うよ？別にお兄ちゃんの匂いを嗅ぎにとかじゃないよ!？」

うん、信じないでおこう。

「じゃあ何で居るんだ？」

「ひ、ヒマだったから……」

「朝飯は？」

「まだだよ」

「じゃあ広間に行ってる。今日はスープカレーだ、旨かったぞ？」

「うーん……でもあんまりお腹減ってないから後で食べる」

どつちからそう簡単に逃げられないようだ。

「とにかく自分の部屋に戻りな。俺は妖怪の山に行かなきゃならぬ  
いんだ」

「また行くの？」

「まあな」

時刻は気付くと10時をまわっていた。

2時間余裕があるからフランにかまっけていても問題は無いがそれよりも人里に行きたい。

「帰ってきたらまた遊んでね？」

「おk。じゃあな」

携帯の瞬間移動を使い、人里のはずれに佇むとある館へ転移した。

外は照りつける太陽が忌々しいぐらいの晴天だった。

「紅魔館に比べればアレだが充分デカイ館だな」

眼前に映るのは稗田阿求が住む館。見た目からして一応和式らしい。

瓦屋根とか東京じゃ殆どみないし。

「ごめんくださいー!!」

モチのロンでインターフォンなど無い。

まもなくして出てきたのは和服に身を包んだ使用人らしき女性だった。

「どちら様ですか?」

「俺は鬼澤颯、外来人だ。稗田阿求殿に会いたいんだが……」

「少々お待ちを」

使用人らしき女性は館に戻り、しばらくしてから「阿求様の許可が

取れましたのでご案内します」とのこと。

スライド式の扉の先は玄関になっていて、少し懐かしい感じがした。

まあ紅魔館内でアメリカ人みたく土足で歩き回るのが当たり前になりかけてたからかも知れないが。

玄関で靴を脱ぎ、使用人の案内の下、阿求が居るといふ和室に到達した。

「阿求様、お連れいたしました」

「さがって下さい。鬼澤さんはどうぞこちらに」

目の前の襖を開くと新聞と俺の顔を見比べる阿求がいた。

「はじめまして、稗田阿求と申します」

「はじめまして。俺は鬼澤颯、外来人だ」

「そうですね、この新聞に載ってるのはどちらから貴方のようですね」

新聞？インタビューとかに答えた覚えは……

「ハッ！？まさか文々。新聞なのか!？」

「ええ、文々。新聞です」

「ちょっと見せてくれ!!」

阿求から新聞を貸してもらい、記事を読む。

固・ま・っ・たWWW

記事には写真付きでこう記されていた。

／号外！！件の赤い霧に終止符が打たれた／

最近騒がれていた赤い霧を止めたのはなんと外来人！？首謀者は紅魔館の主、レミリア・スカーレットで話によると日光が鬱陶しいから赤い霧を発生させた模様。

なお、その外来人は鬼澤颯と言っらしく、博麗氏も結界の事に関して良い評価をしている。

現在、鬼澤氏は人里等で見かけられたりするがどうやら定住地は紅魔館のようで。。。

「今夜は鴉天狗の丸焼きかな」

「ははは、そう言わずに。それはそうと今日は何の用でいらしたんですか？」

「まあ幻想郷縁起が見ただけだったんだが……」

「それなら構いませんよ。案内させます」

「いや、気が変わった。ちょいと用事があるって言うか……また今度頼みたいんだが良いか」

「いつでもどうぞ」

うっ　　こんな薄汚い俺にそんな笑顔を向けなくてくれ……

「感謝する」

そう言い残し、和室を出た。

部屋を出ると直ぐに使用人が来たが俺は案内を断り、携帯の瞬間移

動で博麗神社へと転移した。

転移先は境内のど真ん中で、ボロい神社とすっからかんの賽銭箱が窺えた。

「予想通りだなWWWとりま賽銭で巫女を釣るか」

人里で入手した札入り封筒を取り出し、一万円札をピラピラと音が鳴るように振った。

それとほぼ同時のことである。境内に不穏な空気が漂い始め、鋭い視線を感じる。

「うーん、巫女さんが出てきたら倍にしようと思ったんだがなあ」

わざとらしく大きな声で棒読み口調で釣りをしてみる。

「はっ、博麗神社へようこそっ!!」

声が裏返ってるしwww

本堂から慌てて霊夢が出現した。

人間、金が絡むと扱いやすい物だ。

「霊夢を釣るのは金で安定ですわwww」

「う、うるさいわね!!」

霊夢に諭吉さんを2人献上し、神社内の茶の間に通された。

「ちょっとまってて」

茶の間に着くなり霊夢は奥の廊下へと消え、5分程度で戻ってきた。

「はい、お茶と砂糖菓子」

「あざーす」

卓袱台ちゃぶだいに霊夢が持ってきた砂糖菓子と緑茶の入った湯飲みをお盆から移した。

「で、今日は何の用で来たの？」

「紅魔館での約束、一応果たしに来たって所かな」

「でも私、魔理沙に忠告はしたけど止められなかったわよ？」

「気にすんな。だったら霊夢の顔を見にきたでいいや」

「な！？突然何言い出すのよ！？」

「おやあゝ？意外にもこっち方面のセリフには弱いのかなあ？」

「突然じゃないさ。紅魔館で鉢合わせた時も実際霊夢と話がしたかった……ただそれだけだったからなあ」

「えっ？                    ええ！？」

「霊夢の顔が真っ赤っかWWW」

「真っ赤霊夢だWWW」

「なんてな、冗談だ。本当の所は」

「このっ」

当然の如く霊夢はキレて、袖口から一枚のカードを取り出した。

「スペルカード発動、【霊符】 夢想封印!！」

「その元が欲しいんだよ」

室内なのにも関わらず大玉の弾幕を張るが……

カシヤツ!!

あらかじめ構えていた携帯のカメラで全ての弾幕を一気に切り撮った。

「あんた…まさかそれを言うためだけにそそのかしたんじゃ無いでしょうね?」

「いやあ、ツンデ霊夢なら確実にやらかしてくれると思っていたよ」

「私なら良いけど魔理沙とかだったら消し炭にされるわよ?」

「なに、レミリアやフランに比べれば楽勝さ。

この砂糖菓子とハバネロペッパー位の差があるから大丈夫だよ」

「あのねえ……本気を出せばあんたなんか瞬殺だと思っわよ?」

「俺の結界にヒビしか入れられないようじゃ指一本触れないなww」

挑発に乗るかと思ったが逆に悲しそうな顔をしてこう言い返してきた。

「正直ヒビが入った事自体が奇跡ね……あんな弱点を補い合った結界は二度と御免ね」

「そうか」

霊夢は無言で立ち上がり、ダンスからまっさらなカードを3枚取り出し、渡された。

「作り方は両手で挟んで効果、弾幕の出方、威力の順に念じるだけ。基本的にどんな効果でも作れるけど強い物ほど精神的に疲弊ひへいするわ」

「おう、感謝するぜ」

白紙のスペカを受け取り、特にそれ以上の用事も無かったので卓袱台に乗っている湯飲みの緑茶を飲み干し、霊夢に帰る旨を伝えた。

「もう帰るの？まあ長居しろとは言わないけど……また来なさい」

「ああ、そうさせてもらうぜ。そついや宴会っていつやるんだ？」

「気紛れね。あんた定住地はどこよ？紅魔館？」

「あと一週間ちよいは紅魔館だ」

「ふーん、その間に宴会があったら呼びに行つてあげるわ」

「やけに親切だな」

「お賽銭沢山くれたからね」

やはり霊夢釣りは金に限るwww

携帯を開き、時刻を見ると11:49になっていた。

なんか時間経過が速い気がするのはい気のせいかな？

瞬間移動機能で妖怪の山の麓に転移した。

「昨日は暗くてわからなかったがこれは……………」

麓から見上げた景色は絵画のデッサンに使われていてもおかしくな  
いぐらいに綺麗だった。

暑さを忘れ眺めていると何故か視線を感じる。

辺りを見回しても誰も居ない。てことはもしか……………

「フツ…居るのは解っている。俺にその程度の迷彩は通用しないぜ」  
「？」

「ひゅいつ！？な、なんで！？改良して歪みまで消したのに…」

周囲の景色に溶け込んでいた水色が姿を現した。

「おぬし……何者！？」

「チート機械をもった一般ピープルですwww」

迷彩で隠れていたのは河城二トリ。  
お値段異常で有名なあの二トリだwww

「ちーと機械？」

「いやまあ気にするな」

「気になるよ。見せて見せて」

俺は目をキラキラさせているニトリに携帯を見せた。

「ちーと機械って携帯の事だったんだ」

「やっぱり知っていたか」

「そういえば自己紹介がまだだったね、私は河城ニトリ。この先の滝壺の裏側に住んでるんだ」

「俺は鬼澤颯だ、よろしくニトリ」

てかさっきの感が当たってなかったら俺ただのイタい人だよね！？  
否定はしないが。

「所でここは妖怪の山だよ？人間が登る所じゃない」

「姫海棠はたてに用があるって言ったら？」

「何があるかと私は止めないけどね、気を付けてね？」

やはりニトリは良い奴のようだ。よかったイメージ通りの性格で。

「それとこの辺は管轄外だから見つからないけど犬走椀っていう警備隊の1人の能力が」

「知ってるさ、千里眼だろ？」

「ならもつ言つこととは無いよ。好きにすればいいわ」

「所で……楳は将棋強いか？」

「え？ちよつと強い程度だけど……」

「聞いてみただけだ」

うらむ…確かに千里眼に見つかつてワラワラ集まってきたら面倒だ。

今の内に手を打っておくか。

携帯の武具生成機能を起動した。

分類 ネットクレス

強度 壊れない

能力

- ・装備中に機械探知、能力探知に引つかからなくなる。
- ・装備中、刃物による攻撃を全て回避できるようになる。
- ・装備中、ありとあらゆる生物と意思の疎通をとることができる。

生成して出来た物は百均で売っていきそうなプラスチックの物のよう  
だ。

なんか凄く残念な気分だ…

「手品？」

「いや、こいつの機能だ」

「へえ。その首飾りは何？」

「付けてると探知系の能力と機械に引つかからなくなる」

俺はシヨボいネックレスを首に提げ、山頂を目指す。

何故か後ろから二トリが着いてきてるが気にしない。

「あれ？誰がいる」

「マジか……ん？」

ふと思ったが転生するときの神と厄神とかその他神ってどつゆつ立ち位置なんだ？

今度話す機会があれば聞いてみるか……

「うーん……すごい厄がこの近くにある気がするのだけんど……」

彼女は鍵山かぎやま 雛ひな、厄を司る神様だ。

「見つけた!! そのあなた!!」

え？俺ですか？凄い厄してもしや俺ですか？

雛は俺に近付き、空港でやりそうな身体検査が如く俺の体をベタベタ触り始めた。

「これのようね」

雛は俺のポケットから赤い石を奪った。

「雛……逆ナンは良くないと思うよ？」

AV的展開になったらどうするの?」

「あら、私としたことがいきなり殿方に…… / / /」

そして赤くなる雛。

ニトリ、それは禁句だろWWW

「それ、レミリアに貰った御守りじゃないか」

「この石から物凄く濃厚な厄を感じます」

「だから雛なんでそんなに積極的な?濃厚な厄を感じるとか捉え方によっては……」

「ニトリ!ストップストップ!!それ以上はマヂヤヴァイから止め  
たげて」

このエロガツパめ、きゅうりでもくわえとけWWW

おっと、誰か来たようだWW

「とにかくこの石は持っていない方が得よ？周りから厄を集め続けているし」

「逆に凄いな。てかレミアは何でこんな物を……」

ん？何か変な感じがする……全身がうずうずすると言っか……

本能的とでも言っか、何故か俺はその場から半歩下がった。

その瞬間、俺が居た位置に銀の線が走る。

「なっ！？避けられた!？」

「おまWWW首はまずいだろWWW」

おかしいな、千里眼には見つからない筈だが……

「あれ？何でこんな所に椀が居るの？ここらは管轄外だし」

「いえ、今は休憩時間なんで。滝壺の裏にニトリが居なかったからここに飛んできたから見えない人間が居て」

「だからって首は狙うなよ！」

上空から急速に距離を詰め、居合い切りをしたらしい。

まったく、危ない事しやがって。

## 2人の面倒な新聞記者

「で、見えない事は置いて妖怪の山を登ると言うのならそれなりの措置を取りますよ?」

「首ねらった奴の台詞がそれかよwww  
安心しろ、別に危害は加えないし自分の身も守れる」

「なら何故登ろうとするんですか!?!」

「そこに……山があるからさwww  
正確には姫海棠はたてに用事があるからなんだが」

「あの念写天狗にですか?」

「まあそんなところだ」

「なら警戒として私が同行しますが良いですか?」

あれ？なんか普通に入れそうだな…………

「どうして皆こつも積極的なのかね？ 雛は逆ナンするわ桜はいきな  
りデートに誘うわ………… 私も何かすべき？」

「ち、違いますよ！！私は里のために」

「ニトリ…………お前はお前で積極的過ぎる気がするんだが…………」

放つといたらその内暴走するぞコイツｗｗｗｗ

「とりまニトリ、お前は自分の家に帰れｗｗｗｗ」

「デートの邪魔って言うのね！！私とは遊びだったの!？」

なにこの昼ドラマみたいな台詞WWW

椀がドン引きしてるしWWW

「椀、誤解だ。ニトリがふざけているだけだ。それとデートだとは思っていない」

「こっちを見ないで下さいこの女たらしー」

おkおk。ニトリ…いざられキャラのお前は攻めに回りすぎた。

こっからは俺のターンだ。

「ニトリ、ちょっと耳貸せ」

疑問符を浮かべながら近付いてきた二トリに耳打ちでとある小説の一節を思い出せる範囲で語った。

するとみるみるうちに二トリの顔が赤くなり、ひゅいっと一鳴きした後、一目散に逃げていった。

「何を話したんですか？」

「いやあ、中学生の頃に教室でとある小説を朗読したんだ。そして何人かのクラスメートが教室から顔赤くして出て行ったんだ」

「どんな内容なんですか？」

雖なら多分平気だろう。

二トリと同じく耳打ちで教えてみた。

「あらあらまあまあ。それは純真な心を持った少女には刺激が強す

ぎるかしらね」

予想通りだな。因みに読者の方々の中にはもしかしたら純真な方も居るかも知れない。

まさかね、官能小説をね。この場で朗読するとかね、マジ有り得な

おっと、口が石鹼を踏んでしまったかWWW

「そっぴゃ自己紹介がまだだったな、俺は鬼澤颯、外来人な」

「私は鍵山雛、厄を司る神です」

「犬走椀いぬばしり もみじです。天狗ポリスの監視役兼撃退役です」

いや知ってますよ。

てかさっさととはたてに会わないと。

「椀は着いてくるとして雛はどうするんだ？」

「そうですねえ…よろしければ同行したいんですが…」

「構わないが何も楽しいこと無いかもよ？」

その時上空から影が差した。

見上げるとパンテ

「ぐぼあっ…！」

靴底で思いつ切り顔を踏まれ、勢いで受け身を取る暇もなく地面に衝突した。

「いつてえ〜!!」

「今、見ましたよね？」

聞いたことの無い声がしたので顔を押さえていた手をどかし、姿を確認する。

文か。

「馬鹿か!!俺は紳士だ、見るわけ無いだろう!!仮に見えてしまったとしたらそれは事故だし見えぬ振りをするのが紳士なのだ!!」

「とどのつまり見たんですよね？」

「はい見えてしまいましたすいません」

やっぱ人間、即土下座は基本だな。

「まあ別にそこまで気にしてないんですけどね……」

「俺の人生初の土下座を返せ」

「で、何で椀がここに居るんですか？」

「姫海棠に用事があるらしいのでその人間を里まで連れて行く途中です。」

暇なあなたと違って私は警備の仕事で忙しいんです」

「休憩時間じゃなかったか？」

「あなたはちょっと黙っていて下さい!」

「確か……鬼澤颯さんですよな?」

「そうだが?」

流れるにインタビューされるんだろうなあ。

かつたるいな……

そんな事を考えているとまた1人、誰かが飛んできたようだが先の事から上を向かずに着地を待つと、姫海棠はたてが降りてきた。

「ちょっと文、私の取材対象に手を出す気？」

「あれあれえ？誰がそんな事決めたんですかあ？」

なにこの空気www

波乱なヨカーンwww

「はあ、文のせいで計画が狂ったわ……椀に見付かって戦闘している所を記事にしようと思ったけど……無理なようだから質問に答えられないかしら？」

それで徒歩で来いと言ったのか。

仮に椀が襲ってきても（性的な意味ではない）華麗にスルーして逃げるつもりだったが…

「まだ私の話が終わってないのに勝手に話を進めないでくれる？」

「私はこの人に貸しがあるの、だから優先されるのは私よ文」

言ってることは間違っていないが……争うなら迷惑だから他の場所ですぐ勝手にやってくれ……

## 5人の司りし者

「まあ…なんだ、争いは止めてくれないか？それに俺は姫海棠に頭が上がらない、済まないが取材は姫海棠の後にしてくれ」

喧嘩が止まるなら問題無いだろう。

どうせ似たような事聞かれるわけだし。

「はたての後ならおkなんですか？」

「それで争わないんだったら。俺はこよなく鳥を愛する男だから傷つけ合って欲しくない」

「そ、そうですね…」

私は一旦引きます、はたての取材が終わったら守矢神社までご足労願えますか？」

多分歩かないが別段用事も無いし、守矢神社と言えば早苗さんとか居るだろうし。

今から期待で胸が一杯だ。

「りょーかい。んじゃ姫海棠、手短に頼むぜ」

文はその場から一瞬で消え、はたてによる取材が始まった。

と言っても聞かれたのはどうやって幻想郷に来たか、身長、体重、その他素人の俺でも記事にならない事位判るどうでもいいような事はばかり聞かれ、15分程度で質問は終わったようだ。

「ふむふむ。参考になったわ。それじゃ最後の質問ね、『好きな女性』は？」

テンプレキター

記事にされんのかな……これ……

「ミステリアだ!!」

「そうなんだ。ミステリアも隅におけないわねWWW」

やはりみすちーを知っていたか。  
てかたての事を知っているような事ミステリアが言ってたっけ。

210

「じゃ俺は守矢神社に瞬間移動で行くが……」

この機能って俺以外の人と一緒に移動できるのか？

「うむ、とりま試してみるか」

俺は雛の手を取り、瞬間移動で行き先を『守矢神社』に設定し、決  
行した。

「触ってればとりあえずは移動出来るんだな」

T O L o v e 的 な 展 開 を 想 像 し て い た 時 期 が 俺 に も あ り ま し た W  
W W

よく考えたら服だけ綺麗に脱げるとかおかしいよね W W W

「あれ？雛も来てたの？」

転移先は例の如く境内。

そして前方から何故か空の籠を持った2人の少女が近付いてきた。

「何で秋姉妹が？まだ一応8月だから夏の筈だぞ？」

「誰？」

「彼は鬼澤颯さん、外来人だそうよ」

「初めまして、秋静葉あきしずはです」

「秋穰子あきみのりこと申します」

「雛の言った通り、俺は鬼澤颯だ。以後よろしく」

「あなた達はどうして守矢神社へ？」

「今年も豊作だったきゅうりとかトマトとかの差し入れだよ」

確か穰子が近くに居ると農作物が豊作になるんだっけ。

「雛は何をしに？」

「鬼澤さんの用事で来たので私は付き添いです」

「なあ雛、普通に颯でいいぞ？さん付けとかもかったるいし」

「そうですね？私としては癖みたいな物なので颯さんと呼ばせていただきます」

癖を治せとか言われても困るだろうから俺は何も言わなかった。

てかちょっと図々しかっただろうか？

今日知り合ったばかりの奴相手に呼び捨てとか。

「へえ。そういえば射命丸が誰かを待っているみたいなこと言っただけでもしかして君の事かな？」

「多分当たりだ」

さっさと用事済ませて幻想郷縁起見に行こう。

秋姉妹は河童達にもきゅうりを差し入れに行くらしく、2人揃ってどこかへ歩いて行った。

あの籠は野菜を入れていたのか。

雛と俺は良く掃除の行き届いた母屋に当たる建物へ行った。

「ごめんくださーい!」

返事が無い、ただのsry

「本堂に居るのかな」

本堂へ向うと何故か障子の少し開いた場所があったので中を覗くと、黙禱する緑髪の巫女、目を瞑って何かを呟いている腰に巻いたしめ縄が特徴的な女性、大きな目玉が付いている帽子を被った小学生かと見紛う少女の姿があった。

「お取り込み中悪いんだが射命丸が来てないか？」

我が名は通称、エアクラッシュャー W W W

空気も読まずに声を掛けてみた。

## 射命丸文からの取材

「文屋が待っているって言う外来人はあんたかい？」

返事をしてくれたのは洩矢諏訪子もじやすわこだった。

しめ縄を腰に巻いた女性、八坂神奈子やさかかなこと緑髪の巫女さん、東風谷早苗こうふうやなほは完全に無視しやがった。

「一応そう言う事になってる」

「私は洩矢諏訪子、この神社に祭られている神さ。君は？」

「俺は鬼澤颯、ただの外来人だ。よろしく洩矢様」

俺が自己紹介的なものをする<sup>と</sup>諏訪子は目を丸くした後、何故が大笑いし始めた。

可笑しなこと言ったか？

「いやぁ……ごめんね。颯君が真面目な顔で様付けなんかするから……つい可笑しくて……」

「いやいや、神様なんだからそこは自信持つとけよ！！」

「確かに様付けはされるけど名字で呼ばれたのは久方ぶりだからね」

「そうか。俺の事は好きに呼んでくれて構わない。で、文はどこに居るんだ？」

「文屋なら母屋に居るはずだけど……」

居なかったような……

もう一度探してみるか。

俺はその場を後にし、再び雛と母屋へと来た。

「さつきは居ないようでしたけど……」

「諏訪子の話によると母屋に居るらしいんだ」

玄関には靴が無く、かわりに下駄が置いてあった。

イラストだと下駄だったりするから合ってるのか？

「お邪魔します」

俺と雛は靴を脱ぎ、廊下を進みつつ台所、居間の順に覗くと居間に文が居た。

「あれ？随分早いですね。あそこから少し距離があると思っていたのですが……」

「瞬間移動つてやつだ。ワープとも言つ」

「へえ、ではでは早速インタビューさせていただきます」

そこからは文の質問タイムが始まった。

とは言ってもはたての質問に毛が生えた程度、大した事は聞かれなかった。

はたてと同じく15分程度で質問は終了した。

「どうしてこの程度の質問なのか？って顔ですね？」

くっ、確かにポーカーフェイスには自信が無いが露骨に顔の事言わ

れるとなんか妙に腹立たしいな。

「実は、既にあなたの情報は色々手に入れているんですよ」

「何故に？」

「壁に耳有り障子に目有り、ですよ。どこから情報と言うものが漏れるかなんて誰にも想像は付かないものです」

## 夏祭り開催のお知らせ

文の言う事には一理ある。

俺の場合、幻想郷に来てから接触した人間なんて限られてるから大  
体検討はつくが……………。

「何はともあれ情報提供感謝します。お礼にしては難ですが今日人  
里で夏祭りをやるそうなんですよ。そこでこれを貴方にあげます」

文が差し出してきたのは2枚のチケットのような紙切れ。

内容はプリズムリバー三姉妹によるライブの最前列の席が記された  
入場チケットのようなものだった。

「いいのか？」

「どつぞどつぞ。ミステリアさんでもデートがてら行ってきて下  
ちよ」

「なっ!?!?どうしてその事を!?!?」

「いやあ、しつかと聞きましたよ?いきなり出会い頭に『結婚してくれ!?!』ですからねえwww」

一番知られてはいけない奴に情報を握られたようだ。

もっと周囲に気を配るべきだったか……

「こ、このことは俺の沽券に関わる……出来れば穏便に事を運びたいわけだが……」

「へえ、そうなんですか。」

鬼澤さんって子供好きのロリコンだったんですね」

と、そこで雛がイタズラっぽく笑いながら茶化してきた。

「くっ！！俺はロリコンじゃない！！他の子供には興味すら湧かないからな！！！」

これは実際ウソになる。

事実、俺は押しに弱い性格だと自負している。ゆえにフランからのアプローチには紳士的な対応ができない。この場合のフランはさながら『ずっと欲しかった兄が出来た妹』としての甘え、だろうが。

優柔不断とも言つのかも知れんが……

「TK、この事はできるだけ他言無用で頼む。  
俺はミステリアに嫌われたくない」

「まあ最初から記事にするつもりは有りませんが、そこはご安心下さい。何せオフの時だったからカメラ持ってなかったんですよねえ」

「まあ安心して下さいよ。」

色恋沙汰の記事は意外と人気が低いんです。そんな公開処刑のよう  
な真似はしませんよ」

うむ、信じていいやら...

「ま、まあそうしてもらえると助かる」

「それでは私は用事があるので失礼します」

文はそう言って居間を出た。その直後に少し話し声が聞こえ、諏訪  
子、神奈子、早苗が居間にやってきた。

「何のもてなしもなくして悪かったね。結界の張り直しをしていたん  
だよ」

「今お茶を煎れてきますね」

神奈子と諏訪子は卓袱台を囲むようにして座り、俺と、さっきから何も話さない雛も腰を下ろした。

「はじめまして。私は八坂神奈子。一応神だ」

「射命丸から紹介があったかも知れないが、俺は鬼澤颯、外来人だ」

「うむ、よろしく」

「人里へ向かわなければ」

「ちょっと聞きたい事があるんだがいいかい？」

神奈子が俺に聞きたい事？

気になるな。

「内容にもよりけりだけど」

「いやなに、君が来る前の地球の状態を知りたいだけなんだけどね？何か変わった所は無かった？」

ふむ、変わった所と言えば温暖化程度だろうか。

「俺が知っているのは地球温暖化とオゾン層の破壊ぐらいっスね」

「地球温暖化にオゾン層破壊か……………」

それを聞いて一体どうしようと言うのだろうか…？

「少し気になっていてね」

そこで早苗さんがお茶を煎れてきてくれたようだ。

「いただきます」

俺はお茶を飲みつつ、神奈子と幻想郷についてどの程度知っているのか等をしばらく話し、俺と雛は守矢神社を後にした。

雛は用事を思い出したらしく、ふわふわと飛んでいった。

「さてと、一通り用事も済んだしみすちーの家に行くか……」

幻想郷縁起はまあいつでも見れるし…

後でいいよな……

携帯にミステイアの家の前と入力し、転移した。

「…………留守のようだな……」

何故判ったかって？

屋台が無いからだよ。

祭があるから先に人里へ行ったのかも知れない。

ドラえもんの四次元ポケット（携帯内蔵）から籠手、眼鏡を取り出し、装着する。

次いで空へ飛び立ち、千里眼で上空からミステリアを探すことにした。

「む？あれは……」

眼下に広がるのは木々の生い茂る雑木林のような風景。

木々の開けた草原のど真ん中に高さがおおよそ3メートルはあろうかと言っぐらいのバカでかい怪物がいた。

「な、なんじゃありゃ？」

見た目は人間の形をしてはいるものの、体色は黄土色、目はが一つしかなく、右手には銃刀法違反？ナニソレオイシイノ？的な感覚で刃渡りが50センチをゆうに越す薙刀が握られていた。

せめてもの救いは獣の毛皮をベースに作られた服を着ていた所ぐら  
いか。

一応恥じらいがあるらしい。

幸いにもこちらは上空。

地上からは100メートルは離れている。

当然気づかれてはいない。

「どうすつかなあ……」

明らか人里目指して歩いてるし…人を襲う確証は無いがあんな物騒  
な物持つてるし……」

とりあえず多少距離を取った位置に着地し、声を掛けてみた。

「あー、その道行く大きな方。そんな物騒な雑刀持ってどこに行くつもりなんですかね？」

戦闘力は800〜1500ですか、基準がわからない。

巨人はゆっくり振り返り、雄叫びをあげながらドシンドシンと突進してきた。

「面倒だなあ」

目の前に、物理的な衝撃全てを弾く魔法陣を組む。

そこへ巨人はバカ正直にリンクのジャンプ斬りよろしく、力任せに魔法陣へ雑刀を振り下ろしてきた。

「ぐおおっ!？」

が、薙刀が魔法陣に触れた瞬間、ビデオの逆再生のように巨人が後ろに吹き飛んだ。

「WWW」

「グウゝオオオ」

さて、殺すのは忍びないのでと。

「クククッ。空間干涉魔法陣展開!!」

巨人の足元に半径1メートル程の魔法陣が展開され、その巨体を一瞬で跡形もなく消した。

「さあて、仕事サボって寝てなきやいいが……」

所変わって紅魔館門前。

そこには門番の紅美鈴がウトウトしながら勤務していた。

「ううん……こんなにポカポカ陽気を当てるなんて……太陽は私に眠れと言っているのだろうか……」

と、そこへ今し方、颯と戦闘していた巨人が現れた。

「ぬおっ！！なんか出てきた！？」

その日門番は巨人（後で知ったが正式名称は一つ目男らしい）を倒し、珍しく門番の仕事をしたそう。

## 集団催眠現象

巨人を紅魔館門前へと強制転移させた俺は一直線に人里へ向かった。

道中にミステリアの姿は無かった。

「お？もう祭って雰囲気だな」

着地点は人里の3ヶ所あるうちの一つの出入り口にあたる場所。

見える限りでは提灯が並び、道には所狭しと屋台が並んでいる。

「いたいた。みすちー発見」

千里眼に人数など無意味なようだ。

あっさりと屋台で鰻を焼くミステリアを見つけた。

しかしかなりの行列が出来ていて忙しそうだ。

俺は大群衆の波を華麗に避け、ミスティアの屋台の裏に回った。

「ようミスティア。手伝うぜ」

「あっ！颯さん…有り難いです」

流石に祭だけあってか尋常じゃない人妖の数だ。  
俺は会計＋鰻の受け渡しを開始した。

鰻の量は次々に減り、20分程の激戦の末、見事に完売した。

「ふう。すげー人気だな」

「はは、ありがとう」

まだ何人も並んでいたが完売の札を掲げると蜘蛛の子を散らしたように行列が消えた。

屋台の片付けを手伝い、ようやく全て片付いた。

「また手伝ってもらっちゃって……」

「気にするな。さてと、業務話はここまでだ」

俺は文から貰ったチケットを一枚ミスティアに差し出した。

「これは……プリズムリバー三姉妹のライブチケット？」

「どうだ？一緒に来てくれないか？」

「私なんかが一緒に行つて…いいの？」

「ああ。寧ろ一緒に行つてくれる方が俺にとっては……」

ふと視界の端に見覚えのあるヤツが映つた。

あ、眼鏡そのままだった…

「射命丸か」

「あやや、バレましたか」

路地からこちらの様子をチラチラ伺っていた文が出てきた。

「俺が眼鏡を掛けている時は栲と同じ『千里先まで見通す程度の能力』を使える。以後、気を付けるんだな」

「ほう。これは良いことを聞きました。私は用事を思い出したのでここで失礼します」

「はなっから付いて来るつもりだったのか……」

文は瞬時に上空へ舞い、その姿を消した。

「さてと、邪魔者は居なくなっただし一緒に来てくれるかい？」

「うんー！」

何故いつもミスティアは暗い雰囲気を纏っているのだろうか……

もしや人間自体がキライとかか？

兎にも角にも俺とミスティアはライブが行われるイベント会場のな

場所へ向かった。

会場入り口には3人の係員が居てチケットの整理をしている。俺とミステイアはチケットを係員に千切ってもらい、入場した。

会場に入ると何故か幽霊が沢山居た。と、言うよりは人魂と言った方が適切かも知れんが……

「すごい人（魂）数だな」

「そうだね」

幸いにもライブはまだ始まっておらず、数分後開始されるようだ。

そして待つこと数分。

お馴染みのトリオが現れた。

ライブが始まると同時に会場は物凄い熱気に覆われた。

「なんか凄く懐かしい気分だ……」

「元の世界に帰りたい？」

「全然……と言っより向こうで一度、俺は死んでるだろうから今更戻った所で知り合いは1人も居ないだろうし」

親や友達は何のために涙を流してくれたのだろうか……？

だとしたらここでこうやってピンピンしているのが物凄くいけないことをしているような気になってきた。

「じめん……」

「いや、気にすんな。俺は過ぎた事はどうでもいい主義だから」

しかし

音楽など聞いたのはとても昔のような気がして、少し懐かしかった。

そんな事を考えていると演奏が止まった。

それも曲の途中で。

何事かと思い、プリズムリバー三姉妹を見ると後部の座席に視線を固定させているのがわかる。

すぐに後ろを向くが暗くてよくわからない。

「え？あれ？なんでこんな場所に死神が…」

千里眼を使用して見ると、何人かの死神が次々に人間、妖怪、幽霊を手にした鎌で『殺している』姿が目映った。

その中には画面越しで見たことのある赤髪でツインテールっぽい髪型で浴衣を改造した服を着ていた小野塚小町おのすかこまちの姿もあった。

「な！？何やってんだよ！？」

「っ！！……だめっ！！」

籠手を装備し、出入り口付近へ飛ばすとすると、ミステリアに引き留められた。

「離せっ！！H A N A S E ……じゃなくて…見殺しにしろっ  
てのか！？」

「私が…何とかする」

ミステリアの目が一瞬、妖しく光った。

すると死神達の動きが急に鈍る。

「鳥目か！！ナイスだ！！暫くここで待っていてくれ！！」

俺は今度こそ飛び、この会場に居る死神全員の足元に転移魔法陣を敷き、会場の外へ転移させ、同時に俺も転移した。

「さて、言い訳を聞こうか。死神諸君？」

「……………」

全員が無言。だが、視点がはつきりしていない。

もしかや催眠術か何かに操られているだけなのだろうか？

「クヒヒヒ、随分生意気な人間が居たもんだ。たかが人間1人にや

られるとは死神の名折れ、恥曝し共が」

声の方を向くと…

「四季・映姫・ヤマザナドゥ…」

「おやあ？何故宿主の事を知っている人間が居るのかなあ？確か巫女や魔女の情報しか入っていないが……」

そう言つて映姫は死神の1人を睨みつける。

「も、申し訳有りません」

「まあいい、こうして人里へ出向いたのもこういった力ある人間を見つけ出し支配するためだからな。今回は特別に許してやる」

「ハッ、有り難きお言葉」

何かに……操られているのか？

宿主とか言ってるし。

映姫の目に映らぬようこっそりと眼鏡を取り出し、見てみると……戦闘力がバラつきこそ有るが死神の平均値が40000、映姫に限っては999999とチート臭がプンプンする値だ。

「思念体の類か……」

「何？そこまで情報を持っていると言っことは……こやつ、イレギユラーなのではないか？」

「当たり前か。その体を本人に帰す気、ない？」

「寝言は寝て言え。そう易々とこの逸材を手放すものか」

「じゃあ消えろ」

一瞬で自分の足元に瞬間移動用の魔法陣を展開し、映姫の背後へ転移し、頭を鷲掴みにした。

「何っ!？」

即座に『この体にある四季・映季・ヤマザナドウ以外の構成要素全て』を念頭に分解を発動させた。

すると映季は力なく倒れそうになり、俺はそれを支えた。

「さて、回りの死神さんに宿ってる方々も速やかに体を破棄して逃げないとこっとなるから。10数える」

刹那、一斉に死神達は意識を失い、その場に倒れた。

「うはwww脅しておいて言うのもなんだがテラ弱虫www」

## 異世界からの来訪者

死神達は全員意識を失って、辺りに倒れている。

「で、なんでお前だけ立ってんの？」

「純粹に、あたいは乗っ取られていなかった。それだけだよ」

乗っ取られていなかった？

「じゃあ何で……ああ、山田さんには逆らえない立場だから否応無しに襲撃に荷担したのか。」

「一応信じるよ。俺は鬼澤颯、外来人だ」

「あたいは小野塚小町、見てのとおり死神だ。今回は礼を言わせて欲しい」

「それは無用だな。俺は単純にミスティアを守りたかっただけだし」

「ミスティアを守る？もしかしてミスティアの彼氏か何か？」

「まだ彼氏じゃないな。

何でミスティア知ってるん？」

「たまに屋台へ飲みに行くからね」

「そうか。映季達を乗っ取っていた奴らって何がしたかったんだ？」

「映季様……いや、あの精神体達はこの幻想郷に居る『イレギュラ  
ー』を探して乗っ取ろうとしていた……幻想郷の言葉で言うあなた  
みたいな外来人ね」

なんでまたそんな事を……

「ちょうど一週間位前だったか、たまたまあたりは木陰でサボッ  
……休憩してた時に黒い霧が出てきてね。まるで生きてるかのよう

に蠢いて三途の川の向こう側に飛んでったんだ」

「黒い霧か……」

「それであたいが映季様に報告しようとしたら取り付かれていたんだ。でもあれは霊体じゃなかった、それだけは言える」

ふむ………なんだろ、この異変フラグ。

回収しなきゃ駄目かなあ。

「俺の方でも探りを入れてみる。他に何か特徴はなかったか？」

「他かあ………なんか異界の扉がどうのこうのって話してたけど何の事やら……」

異界の扉………もしか別の世界から来たとか？

奴らを逃がしたのはミスだったか……

「あ、いたいた！君大丈夫？単身特攻してたけど……」

「ああ、事態は収束した。この死神達は得体の知れない何かに操られていた」

声を掛けてきたのはメルラン・プリズムリバー。

確かメルランの音を聴いてるとハイになるんだよね……

「操られていたって……妖術の類かな？」

「いんや、精神体の類な」

そこヘルナサ、リリカ、ミスティアの3人が飛んできた。

「大丈夫!？」

「大丈夫だ、問題な  
」

「あの死神達は？」

いや、言わせるよ。

「精神体に操られていただけだった。今はもう大丈夫だと思う」

と、そこへさらに騒ぎを聞きつけてか2人の女性が飛んできた。

「これは一体何があったんだ!？」

「死神達が精神体に操られていただけだ。今は意識がないようだが」

「ん？君は？」

「失礼、俺は鬼澤颯。初めまして」

「私はここ人里で教師兼自警団の統率をしている上白沢慧音だ。よろしく」

「とりあえずは問題解決したし、再発もしないだろうから祭り中止とかしないでもらえないかな。」

何かあつたら可能な限り俺も手を貸すんで」

「根拠は？」

「俺が多数の精神体に逃げないと消すと言って脅しを掛けた。んで一目散に逃げたから仮に復讐しに来ても俺しか狙わないだろ」

あいつらの目的は恐らくは外来人を乗っ取るか殺すか。

しかし明確に乗り移る手段が判っていないのが唯一の心配だな。

黒い霧は危険っぽいが……

俺はその後、ミステリアと祭りを楽しみつつ問題を起こした妖怪の取締等を手伝った。

〵〵SideChange 八雲紫〵〵

「おい！！話が違うじゃないか八雲紫！！この幻想郷には精神体に対抗できる者はあんた以外に居ない筈じゃなかったのか！？」

「ええ。あなた達に対抗できる『者』は私以外存在しないわよ？」

「四季映姫を乗っ取っていた統領が外来人に消された。これをどう説明する！！」

「簡単よ、対抗できる『者』は居なくても『物』が存在した、只それだけの事よ」

「はあ？何を言って」

「でもあなた達はもう用済み。消えて良いわ」

「貴様裏切っ」

私は喧しい精神体どもの境界を弄り、存在を消した。

なかなか面白いわ。

『鬼澤颯』君

書く影（前書き）

テスト期間が終わって漸く更新できた……

PS3掛かってたら誰だって勉強するよね orz

m また亀更新ですが今後ともよろしくお願いいたしますm（（

晝く影

Side Change 鬼澤颯

結局あのあと精神体、黒い霧共々姿を現さず、無事に祭りは終了した。

それと意識が戻った死神に意識を手放す前の最後の記憶を聞いた所、やはり記憶が欠落していた。

ただ黒い霧によって記憶が途絶えたのは間違いないようだ。

「なんか……色々あって遊んだ気になれないぜ……」

「そう？ 私は楽しかったけど……」

屋台を押しながらミステリアの家へ向かう。

「ねえ」

「ん？」

「その……明日って何か用事ある？」

「いや。特に無い」

「明日の昼に大ちゃん達と一緒に遊ぶ予定なんだけど……よかったら来てくれない？」

「いいよ」

俺はロリコンでは無いが大妖精やチルノ達と遊ぶのも悪くない。

俺はロリコンでは無いが！！

大事な事なので（ry

ミステリアを家まで送り、俺は紅魔館に戻った。

「……………」

「……………」

現在位置は紅魔館の門の前。

そこには立ったまま寝ている美鈴の姿とどつやって悪戯してやろうか思案顔の俺の姿があった。

よし、くすぐり作戦でイコーか。

物音を立てずに美鈴の背後へ回り、首もとを軽く撫でた。

「ふみやあ!?!」

2、3秒やると猫ともつかない鳴き声で美鈴は目を覚ました。

「な、何しゆるんですか!?!」

「クックククWWW」

デコピンもらいましたよ。  
それも気を纏ったなかなか痛い奴。

「いってえな……せっかく咲夜さんに黙っていてあげようかと思っ  
たのにどうしようかなあ……」

「す、すみませんでしたっ！！  
でも寝ている女性の首筋を撫でるなんてデリカシーが足りませんよ  
？」

「いやあ、すまんすまん。ま、起こしてあげたんだからいいだろ？  
大声出して咲夜さんに気付かれるよりは」

「むう、今度は許しませんからね？」

「いやもう寝るなよ…」

美鈴に軽く会釈し、俺が館内に入ると妖精メイドの一人が寄ってきた。

「おせ……………お嬢様がお待ちです、ホールへお急ぎ下さいです」

「ぶふう！？今おせうって言い掛けたよね！？」

「う、冗談を。アハハハ」

聞かなかった事にしよう、そうしよう。

俺はいい加減覚えた道のりでホールへと向かった。

「遅いつー!!」

「いやあ、サ セン」

ホールへ入るなり第一声がそれ。俺が応答した直後に走る腹部への衝撃は最早テンプレ。

「ねえ様の言つとおり遅いよ!?!」

「わ、わかったからどいてくれ………苦しい」

失念していた……完全な不意打ちだ……口に胃液が昇って来やがった……

「一つ聞きたいんだけどいいかしら？」

「なんだ？」

「咲夜、カゴを持ってきなさい」

「畏まりました」

一瞬咲夜が消え、再び現れたと同時に高さ2メートル、縦横幅が1.5メートル程度の箱状の鉄格子に囲まれた見覚えのある少女が出現した。

「姫海棠！？なんでオリなんかに！？」

その少女は姫海棠はたてだった。

しかも何故か猿轡に両手拘束に目隠しが施されており、パツと見た感じ誘拐にしか見えない。

「どうやら合っていたようね。で、どうやったら連絡が取れるの？」

「と、とりあえず誘拐は良くないから解放してあげてくれ……話はそれから……」

「仕方ないわね、咲夜」

「わかりました」

一瞬ではたてを囲んでいた檻、拘束していた縄、猿轡、目を隠していた布が消える。

「ガクブルガクブル」

いやまあトラウマってるであろう予想はしていたがなにされたんだ  
……？

気になるようなならないような……

「気になります？」

「読心術！？どんだけ万能なんだよ咲夜さん……」

「……は誰？私はド」

「ちょ……マジで大丈夫か姫海棠」

「あ、鬼澤さん……」

ようやく周りの事が頭に入ってきたのか、はたては辺りを見回してからブツブツと呟きだした。

「確か妖怪の山に帰る途中に後ろからいきなり薬臭がされて……気付いたら目が見えなくて動けなくて……」  
「解放したわよ、早く連絡手段を教えなさい」

「ああ、姫海棠、携帯を貸してもらえないか？」

俺は姫海棠から携帯を受け取った。

「そうだな、定期連絡でも入れるか。こうしよう、2日に一度、この携帯に連絡を入れる。電話って言って遠く離れている相手と会話するための機能なんだ」

「成る程、要はその携帯をソイツから奪って持っておけば良いのね？」

「最後まで聞け。俺は敢えて携帯の操作方法は教えない」

「何故？」

「それをしたら姫海棠を介した意味が無くなるだろう？それに携帯はかなり重要な役割を果たす時がある」

「あくまでその天狗を介して連絡を取りたいと？」

「とどのつまりそう言う事だな」

流石に他人の所有物を奪ってまで連絡を取りたいとは思わない。

いくら約束と言えど姫海棠にとってかなり酷だろう。

念写も出来ないだろうし。

「残された時間は少ない。」

「応他の手段も模索するが今回はそれで勘弁してくれ」

「まああんたがそう言うなら仕方ないわね」

レミリアはやれやれと言った様子で肩を竦めた。

その後姫海棠は解放され、俺は夕食を頂き、なんのイベントも無く風呂に入り、そして自室（仮）へ戻った訳だが……

「まあ予想の範囲内だからそこまで驚かないけど……」

明らかに部屋の中に誰か居る気配がする。

「また部屋に入ったのかフラン、遊ぶなら明日に」

「しぎげんよう、鬼澤君」

しかし部屋の中に居たのは俺の予想に反し、八雲紫だった

## 八雲紫の思惑

。

「なるほど、大方話は理解したがわざわざあそこまでする必要はあったのか？」

紫の見込み違いだったら俺間違いなく死んでたよね？」

部屋に入ると紫に話があると言われ、聞くと先の一件の精神体どもを別の世界線からひっぱってきたのは他でもなく紫らしい。

どうやらワザと俺を襲うように仕向けたらしい。

「私が気になったのは貴方の能力よ。3つも持ってるし」

「俺の能力？」

「そう。貴方は気付いてないかもしれないけど、『正と負を操る程度の能力』、『ありとあらゆる事象を吸収できる程度の能力』、そして三つ目が」

『世界に愛される程度の能力』

「は？前者の2つはいいとして最後の何？」

世界から愛されるってなんだ？  
擬人化でもしてくれるん？

「最初私もそう思ってね。興味本位でその能力の性質を知りたいと思っただのよ」

「てか俺のデフォスペックに3つも能力があっただ……」

「結論だけ言うわ。おそらくその能力は貴方の望まない事が起こらなくなるような能力だと推測したわ」

「それってある種レミリアと同じ能力じゃん」

「まあ確かに運命を規定できる点はそうかもしれないけど残念ながらそももいかないと思うわ」

「なんでだ？」

「世界は貴方の望まない形で貴方の望みを叶える可能性があるという点よ」

273

望まない事を起こさないのに望まない形で叶える？

意味が分からん……

「例えばそうね、貴方が誰かに殺されそうなき貴方が生きたいと望むとする。

すると世界は殺人者を止めるのではなく殺人者を殺す事でその望み

を叶えるかも知れない」

「つまりその状況下で俺が生きたいと望むと俺のせいで誰かが死ぬと？」

「あくまで物の例え、だけどね。可能性は0じゃない」

これは……神の魔改造デバイス要らなかったんじゃないか？

しかし言われないと気付けない能力だな……

「まあ気を付けなさい。  
余計な望みを強く願わない事ね。  
でないと周りに迷惑が掛かりそうだし」

「みただいな」

しかし実感が湧かない……

てか正と負を操る程度の能力って何だよ……

「その能力の検証は貴方自身がやらないといけないわね。私には判らないし」

正と負か……

+と-であってんのかなぁ……数学なんて興味無いのに……

(悪いけどまだまだ貴方には動いてもらおうわよ。  
その能力、存分に発揮しなさい)

その後紫はすぐに家へ帰った。  
なんつーか自由な奴だ。

「さあてと、眠くないけど寝るか」

結局能力は判らず、他にやることも無いので寝る俺だった。

弾幕鬼ごっこ 前編

翌日の約12時頃、俺はレミリアに許可を得、ミスティアの家へと向かった。

「ミスティアく？居るか？」

返事がない、ただの（ry

ふむ、もう湖畔に行ったのかな？

湖畔までそれほど距離が無かったので俺は歩いて湖畔まで向かった。

「お？大方揃ってるな」

湖畔付近の雑木林からミステリア、大妖精、チルノ、ルーミア、リグルの姿が確認できた。

「おお〜い」

「ムツ!? アイツは……」

「おはよ〜なのだ〜」

「いやいや、もう『こんにちは』だる時間的に」

「そーなのかー?ならこんにちワンなのだ〜」

「じぶつwwwルーミア、もう挨拶ネタは古いから!~!」

「そーなのかー」

てかどこで覚えたんだよ!?

なんなの？

TV持ってんの！？

「そついやリグルとは初対面だったな、俺は鬼澤颯、ただの外来n

」

「気を付けて！！こいつ、ただの『れいぷま』だから

レイプ魔！？

何故そうなった！？

「ちょ、チルノ何言ってやがる、俺はそんなヤツじゃあ断じてねえ」

「嘘だつ！！この間あたいのことおかそうとしたもん！！」

「アホか！！お前が蛙を氷付けにしてたから羽交い締めにして止め

「たんだろっが!!」

「よ、よろしく鬼澤さん……」

「誤解だ!! だからそんな汚物を見るような視線を向けるなリゲル  
!!」

「なんで名前知ってるの?」

グツ……痛いところ突きやがって……

「原作知識です(笑)」

「原作知識?」

「あ、幻想郷縁起で知ったって言えば解るか?」

「ああ、成る程ね」

「で、今日は何をするんだ？」

「よくぞ聞いてくれたー！」

今日は『弾幕鬼ごっこ』をやるのよー！」

無い胸を逸らしてチルノが威張る。

「何だ弾幕鬼ごっこって？弾幕ごっこなら判るが……」

「んっふっふっ、簡単に言えば」

ルールはこうだ。

鬼となった者が逃げ回る者に弾幕を張り、弾に命中した者が鬼となる。

但し鬼になれるのは3度まで。

4回目の鬼となった者が敗北となり、罰ゲームを受けるそうだ。

そして鬼以外の者同士で弾幕をぶつけ合って被弾した場合、鬼になれる回数が減少し、0になった場合も敗北となる。

要は全員が敵だが協力して鬼を潰すことも出来るわけだ。

「それじゃー弾幕鬼ごっこを開始するわ!」

「鬼は?」

「あなたがやりなさい、鬼澤颯!!せめてものハンデよ」

「何故にハンデ?」

「最初の鬼は回数にカウントされないんですよ」

成る程な。

駄菓子菓子、それはそれで協力出来ない気が……

「んじゃ鬼は100数えてから動いてね……始めっ!!」

刹那、突風が俺の周囲を突き抜けた。

訂正、チルノ達が一斉に散った風だった

弾幕鬼ごっこ 後編

「98…99…100!! 数え終わったのは良いんだが、これじゃあかくれんぼだよな……」

辺りの木陰には人の気配すらない。

「さてはどこに隠れたんだ? ……っ!？」

辺りをキョロキョロしていると、どこからか音もなく弾幕が迫ってきていた。

距離は50m程度で速度は人が歩く速度と大差無い。だが

「ありや完全にホーミング弾だな、逐一向き補正してやがる」

飛んできている弾幕はカクカクと揺れながら俺目掛けてゆっくりと進んでいる。

弾幕の見た目からしてミステリアやチルノの弾じゃない。とすると大妖精かりグルが撃ってきている。

回避できないとわかったらやることは一つ、受けるか撃墜するかだ。

俺は籠手、眼鏡、ネックレスを装着し弾幕で正確にホーミング弾を撃ち、相殺した。

「うむ、弾幕の出元がわかればなあ……」

とりあえず千里眼で辺りを見回す。

「ほう、この弾幕はルーミアだったか。なら攻守交代だ」

一直線にルーミアが居る木陰との距離を詰める。が

「あぶねっ!!」

横から大量の氷塊が飛んできた。

慌てて高度上昇し、回避する。

「ちっ　　ハズしたか…ルーミア!!逃げよ!!」

「そーなのか」

チルノとルーミアは協調してるのか……面倒な……

その場からふわふわと浮かびながら離れるルーミアとチルノ。

「やられっばなしは御免だぜ!!」

すかさず二人の背中に向けて5段階角度調整ができる擬似的なホーミング弾を放つ。

「あいたっ!!」

「よっしやあぁ!!」

逃げるチルノの背中に擬似ホーミング弾が命中したのを確認し、俺は一目散に逃げた。

「ちっ、待ちやがれー!!」

すかさず踵を返し、追ってくるチルノ。

だが

「ごめんなのだ」

「ルーミア!？」

ルーミアがチルノ目掛けて弾を打ち始めた。

鬼を狙うようにプログラミングでもされていたのだろうか……

そしてここに来て漸く『意思の疎通』が役に立った。

『人間から見て5時の方向から虫が狙っているぞ』

木々がそう教えてくれた。

言われた通り5時の方向を千里眼で見透かす。

(え！？見つかった！？)

運の悪いことに、リグルは一発しか放てない上に溜時間の長い弾だが、初速、弾速に特化し、角度補正も少し出来る弾を溜めている真っ最中だった。

「てりゃあー!!」

そんなリグルに向け、俺は速度重視の光弾を複数放つ。

だがホーミング性能が無く真っ直ぐにリグルへ飛んでいった光弾は簡単によけられるだろう。

餅のロンでフェイクだがな。俺は光弾に隠すようにホーミング弾を放った。

(直進する弾?こんな簡単に避けれ　　っ!?)

案の定リグルは光弾をストレスで避けようとし、光弾の後ろにあるホーミング弾の接近を許してしまった。

「うわっ!?!」

どうにか対応し何発か相殺したようだが一発だけヒットしたようだ。

「今の内に逃げるのが吉だな」

ヒットアンドアウェイとは正にこの事か。

リグルが後続の光弾に気を取られている隙に俺は木々の間を縫うようにして逃げた。

「やってくれるじゃないか……っってもう居ない……」

颯とリグルが相対している間、チルノとルーミアの戦いも一段落付いていた。

「逃げられたのだ」

チルノは湖の上にルーミアを誘導し、うまく霧に乗じて逃げたようだ。

一方でリグルは颯の搜索をしていた。

「うーん、見つからないかあ」

自慢の虫を駆使し、颯を探すがなかなか見つけれられない。

（しかし何だろう…虫達が何か隠しているような……）

それもそのはずである。

颯はリグルの能力を知っているからか、意思の疎通を使って虫達に口止めを行っていたのだ。

「あれ？リグルちゃん？」

「ん？ああ、大ちゃんか」

「あれ！？リグルちゃんが被弾するなんて珍しいね？」

「ちょっとあの外来人にね。意外にもキレるヤツだったからしくじっっちゃったんだ」

「あ…そ、そうなんだ…」

何か後ろめたそうに目線を逸らした大妖精。

「どづかした？」

「えと…まああの人の事が少し気になって…」

「はあ？それってもしかして……惚れた？」

「いつ、いやっ！！そういう意味じゃなくて！！なんていうか…あの  
人から吸血鬼の感じがして…」

「ああそれね。私も気付いてたけど確か紅魔館の執事やってるんで  
しょ？その感じをまとってるんじゃないかな」

「やっぱりそう…かな」

「取り敢えず本人も外来人って言ってたんだしそうなんじゃないか  
な。  
流石に外界に吸血鬼はもういないだろうからね」

「確かに……」

「それはそうとこれからどうする？」

「チルノちゃんはまだいいけどルーミアちゃんは結構危ないから逃  
げようよ」

「ん、そうだね」

「わは、だから逃げるのだ？」

二人の背後からルーミアが声を掛けた。

バツと勢い良く振り返るとそこには闇を纏ったルーミアの姿があった。

「隙ありなのだ！」

ルーミアは大妖精とリグルが臨戦態勢になる前に弾幕を連発した。

狙いは完全にリグルだった。

恐らくは一度被弾して残機の少ないリグルを沈めるためなのだろう。

(ああ、罰ゲーム決定か…)

リグルは衝撃に備え受け身の型をとりながら目を瞑った。

しかし 来るべき弾幕はリグルに接触することはなかった。

「…な…んで…?」

「あちゃー、一発被弾かあ。しくじったな」

リグルの目の前には籠手を構えた颯の姿があった。

「大妖精、俺の後ろに居てくれ。ルーミアの相手は俺がやる」

「そーなのかー」

クックック、ルーミアには一番最初に狙撃された借りを返してないからなあ……

「あんたのこと狙ったのに助けるの？」

「なんだ？不満かりグル」

「だ、だって……」

「ルーミアに借りを返す前にゲーム終了は気に食わないんでなあ」

「……え？」

「待っていてくれてありがとよルーミア。それとも戦略を練ってたかな？」

「なんの事なのだ？」

「まあこの際どうでもいいや、それじゃ戦闘開始」

「うわあああああ！……！」

あれ？なんか？の断末魔の叫びが……

「そのの二人、ゲーム終了だよ！今回はチルノの負け！」

「み、みすちー？」

「ちょっと残念なのだ」

その後聞いた話だとルーミアがリグル達に奇襲を掛けるちょっと前

に霧から出て来たチルノをミステリアが発見し、トドメを差したら  
しい。

## チルノの罰ゲーム

「この借りはいつか返すぜルーミア」

「望むところなのだ」

因みに罰ゲームはと言うと負けた人以外の誰かが決めららしい。

「よかったあ、この間は散々な目に遭ったし……」

「前はは大妖精が負けたのか？」

「はい。ルーミアちゃんにやられて……」

「その時の罰ゲームは酷かったなあ。確かチルノ発案の紅魔館の主の下着を盗んでくる、だったっけ？」

「はあぁ!?!?」

「うん。ほんと散々な目に遭ったよ……どうにか妖精メイドから逃げたのはいいけど下着を手に入れてから鼻血を垂らしたメイドに追回されて……しかも罰ゲームは絶対だから逆らえないし……」

あ、咲夜さんね。

と言うかコレは……

「なあ、今回の罰ゲーム、俺が決めていいか？」

「え？駄目とは言わないけど……」

「なら、この鬼澤颯が敗北者チルノに命ずる！！」

「あ、エッチなのは駄目だからね」

下着泥棒も充分エツチだろ……

「以後、この弾幕鬼ごっこを開催することを禁ずる……！」

……。

「ああ、その手があったか」

「よつやくこの地獄から解放される……」

「ええ！？そんなのズルいよ……！」

「クケケ、罰ゲームは絶対なんだろチルノ？」

「ぐぬぬ……」

わお、チルノのぐぬぬとかw  
まぢ役得ですわ〜w

その後チルノと多少揉めて、しばらく話をしたあと解散になった。

「ねえ大ちゃん」

「なあに？リグルちゃん」

「私、惚れたかも」

「え？ええ！？あの鬼澤さんに!?!」

「うん。いや、なんかさ、男らしいっていうか…それに攻撃した私の事庇ってくれたし…」

「でもあれはルーミアちゃんに………」

「うん、そうだけどさ」

大妖精とリグルの帰り道、  
こんな会話があつたことを颯は知らない。

## 弾幕鬼ごっこ その後

「あ、鬼澤さん。お帰りなさい」

「おう美鈴。門番頑張れよ」

弾幕鬼ごっこを無事終え、紅魔館へと戻った俺は真っ先に風呂へ向かった。

「ふう、やはり風呂は日本人の文化や……」

大浴槽に浸かりながらしみじみ思う。

因みに今日は先日の失態を踏まえ、あらかじめ誰も居ないことを確認してから入った。

そして夕食の席にはフランは居らず、何故かレミリアから品定めす

るような意味深な視線を送られながら食事を済ませ、俺は自室に戻った。

明日はなにをして過ごすのか……

そんな事を考えながらゴロゴロしていると、いつの間にか俺は意識を手放していた。

## 第一能力開花

翌朝

「……………」。

「すう……………すう……………」

おかしいな、寝ぼけてるのかなあ……………」

なんかフランがそばで寝ている幻覚が……………」

「あの、快眠中済まないんだが……………」

「ふえ？あ、おはよ……………」

目を覚ましたフランは小さな欠伸を一つし、キョトンと俺を見ている。

「いやあの何で俺の部屋で寝てるんですか？」

「ん？なんとなく」

なんとなく、じゃねえよ！！

てか一応施錠して寝た筈だが

ああ、見事にドアが消えてますね。

「助けて咲夜さ〜ん！！！！！！」

大声で咲夜さんと呼ぶ。

数秒のラグがあったから、

「どうかし……まあ、兄妹で仲が良いこと／＼」

「違う違う、勝手にフランが強行突破したんだ！！ドア破壊して」

「あら？…本当ですね。」

今日中に直させますね」

そう言うと言い返す暇もなく咲夜さんは姿を消した。

理不尽ってこつこつことを言っただな。

「もしかしてフランのことイヤだった？」

「ああ、イヤだった」

嘘も方便と言うのもこのことだろう。

が、そのセリフを言った瞬間フランがぐるぐるしながら俺を上目遣いで見つめてきた。

くっ、なんという破壊力…

「あゝ、今度からはフランの部屋で寝ような。俺の部屋はクサいし汚いから」

あ、あくまで寝かしつけるだけね。  
そこ勘違いしない。

ついでに言うと俺の部屋は臭くも汚くも無いけどね。

「臭くも汚くも無いと思うけど……まあいいや。約束ね？」

それだけ言つとフランは俺の部屋を出て行った。

「朝から騒々しい……」

そして二度寝を決め込む俺だった……

次に目を覚ましたのは予想外な奴からの予想外な攻撃だった。

「……」

「……………」

「鬼澤さん　て下さい」

「……………」

「こっぴなったら」

直後、体に電流でも流れたんじゃないかと思うほどに体が痺れた。

「あばばばば……なっ、何しやがる!!」

「やっと起きましたか。お嬢様がお呼びですよ?」

「お前俺に何をした?」

「いやなに、神経にチヨロツと気を流しただけですよ」

だからあんなビリビリ痺れたのか。納得。

「ん?電流?」

「どうかしましたか？もしかして気を流しすぎましたか！？」

「まで、確か落雷って雲の中に摩擦によって生じた負の電子が地表の正の電子に引き寄せられて発生するんじゃないか？」

「なんですか急に…頭大丈夫ですか！？記憶有りますか！？」

美鈴がまくし立てるが今は耳に入らない。

「ごめん、レミリアには後で会うから先にパチュリーの所行ってくる…！」

「えっ？ちょ、待って下さ」

俺は美鈴の制止を無視して図書館へ転移した。

「きゃっ!!」

「のわっ!!」

しかし転移先に何故か小悪魔が居て互いにぶつかり合い、尻餅を着いてしまった。

「一体なんなん……うわっ!!変態さんだ!!」

「悪い小悪魔、パチユリー居るか？」

土埃を払いながら尋ねた。

「パチュリー様ならこの通路の奥に居ますけど…」

「ありがとう」

俺は足早にパチュリーが居る場所へ向かった。

「あら、おはよう。何か用かしら？」

「落雷の仕組みってわかるか？」

「落雷？確か雲中の氷粒子がぶつかり合う摩擦で雲中の上の方に正電荷、下の方に負電荷が集まって地表の正電荷に雲中の負電荷が誘導されて起きる、そんなだったわね。でもそれがどうしたの？」

当たってたか。

てことは俺の能力は雷を発現出来る能力だったんだ。

試しに右手に正電荷、左手に負電荷を集める。

と言ってもなんとなく念じただけが。

「おおっ!!」

すると両手間でバチバチと青白い火花が飛ぶ。

「いててっ、こりゃ扱いに注意が要るな」

「それあなたの能力？」

「そ。『正と負を操る程度の能力』だ」

「ふうん。てことは何でも出来るんじゃないかしら?」

「なんでも？」

「例えばだけど磁界を操ったり、素粒子に負の力を与えて物体を破壊したりとか」

あれ？なんか主人公補正が働いてね？

チートだろWWW

「ただまあいきなりそんな事したら体が保たないでしょうね」

「そうかもな。まっ、地道に努力するさ」

それから暫くパチュリーの思い付いた正と負関連で出来そうなことをひとしきり聞いた後、広間へ徒歩で向かった。

「やっと来たわね？レディを待たせるなんて紳士としてどうなのよ」

「いやなに、能力が開花したもんで」

「へえ。どんな能力？」

「『正と負を操る程度の能力』だ。例えば雷を発生させたりできる」

「へえ、なんか強そうな能力だね」

フランが無邪気に笑う。

それに対しレミリアは考え事をしているようだ。

「それ、かなり使い道が有るんじゃない？」

「ああ、パチュリー曰わく時間にも干渉できるそうだし」

時間を負に働かせる。  
つまり時が戻る事になる。

負の使い道が尋常じゃない。

「まあ能力はいいわ。今日はちょっと頼み事が有ってね」

「頼み事？」

「そうよ、フラン」

「実はね、人里に遊びに連れて行って欲しいの」

「人里にか。まあ構わないが……………」

「やった!!!」

うむ、しかし何かイヤな予感がする……

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2566v/>

---

†正義の崩壊者†

2011年12月18日19時54分発行